

# 淡青

t a n s e i

20

2007.11

[第一特集]

## 創立130周年 ——未来へ

[TOPICS]

21世紀COEプログラムの今

[第二特集]

### UT Forum in Seoul

[総長対談 in Seoul 1]

東アジアに学術の架け橋を

[総長対談 in Seoul 2]

日韓の大学教育を語る

[キャンパス散歩]

日本の地震・火山噴火を追って  
地震研究所の15の観測所

淡青

20

t a n s e i

2007/10

本郷キャンパスの象徴のひとつ、赤門は、元々、この地にあった加賀藩前田家の門でした。前田斉泰が將軍徳川家斉の第二十一女、浴姫を夫人として迎える際に朱色に塗られ、現在まで残されています。なお、本学創立130周年記念事業「知のプロムナード」のひとつとして、警備の番人が詰めていた「番所」(赤門の左右脇)が公開されます。

「淡青」について

東京大学と京都大学(当時は東京帝国大学、京都帝国大学)が1920年に最初の対抗レガッタを瀬田川で行なった際、抽選によって決まった色が「淡青(ライト・ブルー)」であり、本学の運動会をはじめスクール・カラーとして親しまれてきました。



『淡青』20号ができあがりました。東京大学創立130周年を迎えるにあたって、本号は意欲的に話題を集めていますので、盛りだくさんな内容になっているかもしれません。

駒場や本郷の各所で新しい教育の試みが行われ、大学院研究科や附置研究所を超えた研究組織が相次いで作られています。三極構造の新たな拠点となる「柏地区キャンパス」も紹介されています。それに忘れてならないのは、「男女共同参画」、「バリアフリー」などキャンパス生活をいっそう充実させる取り組みも始まっていることです。東京大学がますます大きな責任を担っている様子を、感じとっていただければ幸いです。

恒例の総長対談は、ソウルで開かれたUTフォーラムに合わせて、ソウル大学校、高麗大学校両総長と登場しています。東アジアで教育・研究の連携を強める意味で、興味深い話題が語られていますので、どうかお楽しみください。

広報委員会委員長 石見徹



## index

p.3-18

【第一特集】

### 創立130周年——未来へ

p.19

【TOPICS】

21世紀COEプログラムの今

p.20-31

【第二特集】

### UT Forum in Seoul

【総長対談 in Seoul 1】

#### 東アジアに学術の架け橋を

【総長対談 in Seoul 2】

#### 日韓の大学教育を語る

p.32-33

【キャンパス散歩】

日本の地震・火山噴火を追って  
—地震研究所の15の観測所—

p.34-35

【キャンパスニュース】

# 創立130周年

維新の興奮醒めやらぬ頃、  
東京・本郷にひとつの大学が誕生しました。  
以来、その大学は、  
先人の残した「知」を受け継ぎ、  
新たな「知」を創り出しながら、  
130年という年月を重ねてきました。

## 東京大学 — 未来へ。

一世紀以上の時を経ながらも、  
私達のまなざしは常に  
未来に向けられています。

### 教育

- ・KALS  
(駒場アクティブ  
ラーニングスタジオ)
- ・工学教育推進機構

### 研究

- ・人文知の現状と展望
- ・分野横断型研究組織

### 国際化

- ・柏国際キャンパス構想
- ・柏の葉国際キャンパス  
タウン構想

### 多様化

- ・男女共同参画室
- ・バリアフリー支援室

### 快適化

- ・学生支援センター構想



# 未来へ

教育 未来へ  
Komaba Active Learning Studio

# KALS

## 理想の教育空間を求めて

現在の大学教育では早期専門分化の弊害が叫ばれています。  
本学はこの問題に対処するために教養教育の充実に努めてきました。  
ここに紹介するKALSもそのひとつ。  
「教養学部を残す選択をした大学」として、  
東京大学は新たな教養教育空間の創造に取り組んでいます。



### 永田 敬

大学院総合文化研究科 教授  
教養学部附属教養教育開発機構担当

本年5月に駒場キャンパスに開設された「駒場アクティブラーニングスタジオ (KALS)」は、本学が掲げる〈理想の教養教育〉を目指して、新しい教育を実践するために造られた空間である。板書とノートによる従来の聴講型の教室に対し、KALSは、データ・情報・映像などの様々なインプットに対して、読解・ライティング・討論を通じて分析・統合・評価を行い、その成果を総合的にアウトプットする能動的な学習活動、すなわち「アクティブラーニング」を支援するための教室空間である。同時に、KALSで行われる授業では、“その場 (in situ)”での協調学習を採り入れることによって、学生全員が授業に能動的に関与することが求められる。

KALSの最大の特徴は、最先端の情報コミュニケーション技術 (ICT) を活用して、アクティブラーニングの効果を最大限に引き出す設計がなされている点である。140㎡のスタジオと70㎡のウェイトングルームで構成された教室には、授業スタイルに合わせて自由に組み替え可能な机が配置され、4面の壁に設置したプロジェクタを用いて、教室のどの位置からでも講義資料や学習者の作業内容を全員で共有できる。学生一人ひとりに無線LANを装備した40台のタブレットPC

を配備し、データ検索・映像視聴・シミュレーション・ライティング・マインドマップ作成などの学習作業を支援している。このような「ICTを活用したアクティブラーニング」によって、学生自らが、複雑な情報を整理して課題を見つけ出し、その解決を目指して様々な視点から課題に取り組むことにより、広い視野から諸問題に対応できる人材の育成を目指している。夏学期に開講した授業科目「Critical Writing Program」では、KALSのICT環境を活用したリアルタイムな相互批評によって、英語による論理的な作文能力の向上に効果を上げた。今後、NHKアーカイブスの豊富な映像資料を利用した「現代社会論」や、蛋白データや分子動力学シミュレータ等の先端研究の成果を採り入れた「生命科学アクティブラーニング」などの授業を計画している。KALSは教養学部・大学総合教育研究センター・情報学環の共同による教育プロジェクトであり、本学が社会に提示する〈理想の教養教育〉のひとつのモデルである。そして、駒場キャンパスに建設を構想している「理想の教育棟」への第一歩でもある。



### 4面ワイヤレスプロジェクタ

前後左右の四方にワイヤレスプロジェクタを設置してあるため、それぞれ別の画像の投影が可能。さらにスクリーンを4分割し、最大16台のタブレットPCの状況を一覧できる。多方向から豊富な情報が立ち現れる刺激的な空間



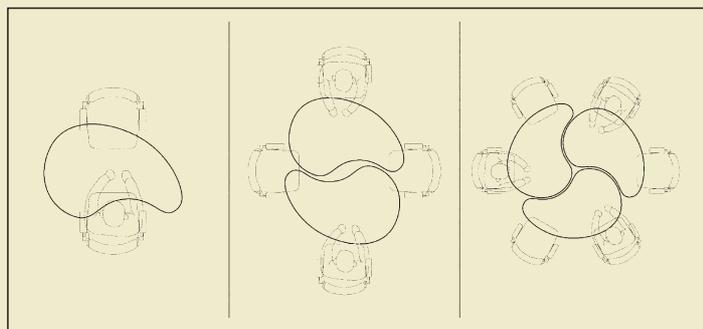
### 瞬間調光ガラス

KALSに隣接する形でウェイトングスペースが設置されているが、その間を隔てるガラスの壁はスイッチひとつで透明・不透明の選択ができる。学生の集中力を削ぐことなく、ゲストは余すところなく講義を見学することができる



#### タブレットPC

KALSでは各学生にタブレットPCが与えられ、教育ソフトウェアを駆使した講義が行なわれる。40台のLenovo社製ThinkPad X60 Tabletはキャスター付きワゴンに収められており、必要な台数をスタジオに引き出して使用する



#### まがたまテーブル

独特なフォルムのこのテーブルは、組み合わせることによって2人用から6人用まで自在に変化する。最適な人数のグループワークを支援するばかりでなく、キャスターによる自由な移動によって、アクティブな空間をも演出する



#### 電子黒板

前面の大型スクリーンはインタラクティブガラスボードになっている。教師は指示棒を使ってこのガラスボード上から直接、教師用PCを操作。機能的な講義が展開する。もちろん、通常のホワイトボードとしての使用も可能



#### パーソナルレスポンスシステム

あらかじめパワーポイントにより作られた問題と選択肢を学生がキーパッドで解答。結果をリアルタイムでグラフ表示する。グループワークやディスカッションのきっかけ作り、学習状況の評価など、利用の幅は無限に広がっていく

教育 未来へ  
工学教育推進機構

# 進化する工学専門教育の姿

学生たちは専門課程において、初めて「分野学問の魅力」を体感します。  
そして、その中でも、強烈に魅力を体感した学生は、研究者への道を歩み始めます。  
専門教育に携わる教員は皆、その魅力を余すところなく伝えるために、  
常に多角的な視点から教育スタイルの進化をうながしているのです。



## 影山和郎

大学院工学系研究科 教授  
同研究科附属工学教育推進機構長

いまでこそ、ほとんどの総合大学には工学部が設置され、工学系の単科大学も数多くあることから、工学はとてもポピュラーな学問領域だと思われがちであるが、現在のような工学教育が始まったのは我が国が最初であり、工部大学校を一つの源流とする工学部の教育組織は、その設立当時には西欧にも例のない日本独自の極めてユニークなものであった。工学部・工学系研究科はその創設当時から、時代や社会の要請に応える人材を育成してきた。また書物（理論）と体験（実践）の両方のバランスを重視した教育方針は、130年を越える工学部の歴史の中で脈々と継承されてきた。

工学教育推進機構の目的は、学生に工学の魅力を伝えるとともに、時代や社会の要請に応える教育及び理論と実践を重視した教育を、現代の高度化した科学技術社会の中で実現することにある。そのために、工学知高度化教育と国際連携教育の2つを事業の柱として活動している。

工学知高度化教育においては、工学の多様性に対応した学生のセルフ・オリエンテーションを支援するため、カリキュラムの体系化、MIMA エンジン、MIMA サーチを開発し、工学教育を構造化・可視化しシラバスを体系化した。また工学系研究科共通科目としての工学倫理講演会や先端技術特別講義の他、教養学部



## ものづくり実験工房

教養学部前期課程「全学体験ゼミナール」「全学自由研究ゼミナール」の講義および実験・演習で用いられる工房。「ものづくり」を体験するための貴重な場

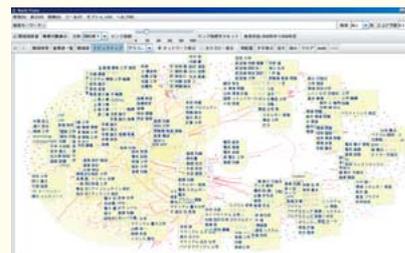


## ビデオ・アーカイブ室

ビデオアーカイブ室では、工学系でのエネルギー、情報などの共通講義、倫理講演会などの講義・講演類のビデオ記録を、著作権の制約のない環境で、学生、教職員が自由に視聴できる。今後さらに、専門分野、課題ごとに、新しいビデオを提供していく予定

前期課程の全学自由研究・体験ゼミナールにおける「ものづくり実験教育」のための環境整備を行ない、これを導入部とする創造性工学教育の実現へとつなげる教育法の検討を行っている。

国際連携教育においては、英語による論文作成能力とプレゼンテーション・スキルを身につけるため、大学院生を対象とした「科学技術英語A・B」を開講し、また「スペシャル・イングリッシュ・レッスン」は、学部学生の英語コミュニケ



## MIMA エンジン・MIMA サーチ

カリキュラムの連関性を詳細に示すMIMA サーチのディスプレイ画面。学びたいテーマに沿った「講義の組み合わせ」を可視化する



## 工学部スペシャル・イングリッシュ・レッスン

外部の複数の英語学校を誘致して行なわれている実戦的英会話講座とTOEFL講座。国際会議での発表・討論に対応するコミュニケーション能力を養成

ーション能力向上に貢献している。

工学教育推進機構は以上のような活動を通して、工学という学問領域の内容と、そのリアルな魅力を学生に伝えていきたいと考えている。



教育・研究 未来へ  
人文知の現状と展望

# 受け継がれる「知」。創り出される「知」。

一般社会、特に産業界から「実学」に熱い眼差しが注がれる現在、

再び「人文知」の重要性が指摘され始めています。

本学は有史以来、永々と積み上げられてきた人類の「知」に立脚した  
「新たな人文社会系諸学の可能性」を模索し続けています。



## 立花政夫

大学院人文社会系研究科長・  
文学部長

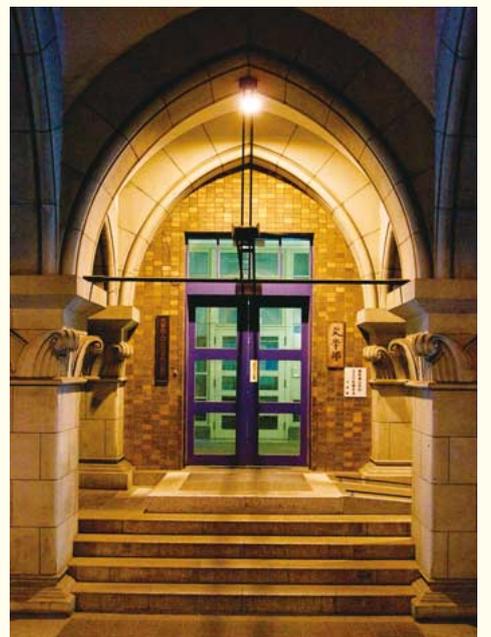
人文社会系研究科・文学部では、人間活動にとって基礎をなす人文知の体系化と継承的発展に積極的に取り組んでいる。大学院重点化に際し、人文科学研究科と社会科学研究科が再編されて5専攻（基礎文化研究・日本文化研究・アジア文化研究・欧米系文化研究・社会文化研究）からなる人文社会系研究科が発足した。その後、独立専攻の「韓国朝鮮文化」と「文化資源学」が創設され、2005年には新しい人文学の構築をめざす「次世代人文学開発センター」が、2007年には世界の文学を扱う「現代文芸論」専門分野・専修課程が設置された。伝統的な授業の他に、文理融合の理念に基づく「応用倫理」「文化環境学」「死生学」、英仏独中の「アカデミック・ライティング」、「原典を読む」といった授業が全学にむけて開講されている。

本研究科では、巨視的な視野のもとで長期的・継続的な研究活動を行うことによってはじめて可能となるような包括的・体系的研究をしているため、ファッション性の高い論文を多数書くというよりは、大部で重厚な書物を著述する教員が多い。企業等との連携で目に見えるような成果を挙げるというよりは、専門書以外に一般書・啓蒙書・解説書等を出版したり、公開講座やシンポジウムを開催したりして、一般社会の期待に応じてい

る。

21世紀COEプログラム「生命の文化・価値をめぐる『死生学』の構築」は、古今東西の死生観を比較研究し、死生の価値についての理論的研究を踏まえつつ、現代の死生の臨床現場に生起する諸問題に応えようとするものであり、医学や医療等の専門家との共同で推進された。その成果を発展させるべく、2007年4月に寄付講座の上廣死生学講座を設置し、2007年度からグローバルCOEプログラム「死生学の展開と組織化」が始まった。また、膨大な時間と労力を要す一方で研究者個人の成果にはならないという基礎

文献の整備に果敢にも取り組んだ教員もあり、諸学会や支援団体の協力を得、十数年の歳月をかけて2007年には「大正新脩大蔵経テキストデータベース」を完成させた。人文学諸分野における学術交流を促進・強化し、東アジアにおける新たな人文学の可能性を切り開くことを目的とした「PESETO（北京大学・ソウル大・東京大学）人文学会議」も立ち上げられた。本研究科は、今後も、学問の体系化と既存のディシプリンの継承的発展を目指すと共に、先端的・学際的な学問領域を創成するために、さらなる努力を続けていきたい。



# 研究 未来へ 分野横断型研究組織 融合、統合、 構造化 — 新たな 学問の誕生

「巨大化・複雑化した人類世界の  
諸問題の解決」を期待される

学術の場においては、

既存の学問分野の「壁」が多くの真摯な  
研究者の眼前に立ち現れます。

この「分野の壁」を取り壊し、

学際・学融合の流れに沿うべく

設立されたのが、

様々な分野横断型研究組織です。

「知」の進化をうながすために……

新たな挑戦が始まっています。



## 岡村定矩

理事・副学長  
総長室総括委員会委員長  
総括プロジェクト機構長

## 東大の分野横断型研究を 支える仕組み

東京大学における教育研究は従来、部局と呼ばれる組織を中心として行われてきました。部局とは、主として研究領域ごとに設置された、大学院研究科、学部、附置研究所、全学センターなどを指す本学特有の呼称です。近年の学問の急速な発展に対応するためには、部局中心の組織運営形態に収まりきれない教育研究も必要となってきました。

具体的に言えば、研究の専門化と細分化で見えにくくなった学問の全体像の提示、少子高齢化社会、エネルギー問題、地球温暖化など人類が初めて直面した世界規模での問題の解決、基礎研究とその多種多様な分野への応用との有機的連携、などなど部局を越えて本学の研究者の叡智を結集する必要のある課題が多数顕在化してきました。

このような、分野横断的な教育研究を

## 東京大学の分野横断型研究（教育）組織

総長室総括委員会	
<p><b>生命科学教育支援ネットワーク</b>（ネットワーク長 福田 裕穂） 東京大学の生命科学に関する教育を支援し、その発展に寄与することを目的としたネットワーク組織。</p>	<p><b>総括プロジェクト機構</b> （機構長 岡村 定矩） 全学として推進すべき研究プロジェクトについて、寄付研究部門または研究部門を設け、総括することを目的とした研究組織。</p>
<p><b>生命科学研究ネットワーク</b>（ネットワーク長 松本 洋一郎） 学内における生命科学研究者のコミュニケーションの促進、及び生命科学の研究組織に関する課題の解決策の検討、その他生命科学研究者に共通する話題についての議論を行い、もって東京大学の生命科学研究の発展に寄与することを目的としたネットワーク組織。</p>	
<p><b>サステナビリティ学連携研究機構（IR3S）</b>（機構長 小宮山 宏） サステナビリティ学に関する国内外の大学・研究機関間の連携拠点の役割を果たすとともに、関連する研究及び教育を推進し、その発展に寄与することを目的とした研究組織。</p>	<p><b>寄付研究部門</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・JR 東日本安心安全工学 総括寄付講座</li> <li>・ジェロントロジー</li> <li>・高速鉄道におけるブロードバンド通信（JR 東海）</li> <li>・知的資産経営総括寄付講座</li> </ul>
<p><b>地球観測データ統合連携研究機構（EDITORIA）</b>（機構長 小池 俊雄） 地球観測データ統合に関する研究及び教育を推進し、国内外の大学・研究機関との連携拠点の役割を果たすとともに、その発展に寄与することを目的とした研究組織。</p>	<p><b>研究部門</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・領域創成プロジェクト</li> <li>・学術統合化プロジェクト</li> </ul>
<p><b>放射光連携研究機構</b>（機構長 尾嶋 正治） 世界最高の高輝度放射光を用いて生命科学、物質科学についての最先端科学を展開し、卓越した研究成果を出し続けて世界をリードし、関連する研究及び教育を推進し、その発展に寄与することを目的とした研究組織。</p>	<p><b>学内研究連携ユニット</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・現代ヨーロッパ経済史（CHEESE）研究連携ユニット</li> <li>・健康・発達支援メカトロニクス研究連携ユニット</li> <li>・先端地球物質科学研究連携ユニット</li> </ul>
<p><b>生物機能制御化合物ライブラリー機構</b>（機構長 長野 哲雄） 生物機能を制御する合成小分子化合物に関する研究を推進するとともに、国内外の大学・研究機関との連携拠点の役割を果たすことにより、その発展に寄与することを目的とした研究組織。</p>	
<p><b>ナノ量子情報エレクトロニクス研究機構</b>（機構長 荒川 泰彦） ナノ技術、量子科学及びITハードウェアの先端融合領域におけるイノベーションの創出のための研究・教育を推進するとともに、国内外の大学・研究機関・企業との連携拠点の役割を果たすことにより、その発展に寄与することを目的とした研究組織。</p>	
<p><b>知の構造化センター（ネットワーク）</b>（ネットワーク長 松本 洋一郎） 自律分散的に創造される知識を構造化することにより、知的価値、経済的価値、社会的価値、文化的価値に結びつけるための方法論を構築し、成果を実装することを目的としたネットワーク。</p>	
<p><b>海洋アライアンス</b>（機構長 浦 環） 海に関わる教育研究の部局横断的なネットワーク組織。次世代を担う総合的人材の育成に取り組むとともに、海に関わる現代的課題の発掘と、その解決のためのシンクタンクの役割を果たし、もって海洋関連分野における教育研究の国際的な核を形成することを目的としている。</p>	
<p><b>エネルギー関連研究ネットワーク</b>（ネットワーク長 西尾 茂文） エネルギーに関わる教育研究の部局横断的なネットワーク組織。次世代を担う総合的人材の育成に取り組むことを視野に入れ、エネルギーに関わる現代的課題の発掘と、その解決のためのシンクタンクの役割を果たし、もってエネルギー関連分野における教育研究の国際的な核の形成に資することを目的としている。</p>	
<p><b>トランスレーショナル・リサーチ・イニシアティブ</b>（機構長 平尾 公彦） 学内におけるトランスレーショナル・リサーチに関わる研究者のコミュニケーションの促進と諸課題に関する検討、及び基礎研究の成果に基づく橋渡し研究や臨床研究を促進し、その成果を医療の現場に還元することにより、わが国のトランスレーショナル・リサーチ促進に寄与することを目的とした研究組織。</p>	
<p><b>数物連携宇宙研究機構</b>（機構長 村山 斉） 世界トップレベル国際研究拠点形成促進プログラムに選定され発足。現代基礎科学の最重要課題である暗黒エネルギー、暗黒物質、統一理論（超弦理論や量子重力）等の研究を数学、物理学、天文学の連携により進め、宇宙の起源と進化の解明を目指す融合型研究拠点。</p>	

支える仕組みが、総長室総括委員会とそ  
のもとに置かれた機構等の組織です。組  
織図に示されているように、2007年10  
月現在、13の機構等が活動を行っていま  
す。このうち、総括プロジェクト機構は、  
小宮山宏総長の強いリーダーシップによ  
って設置されたものです。この中では、  
学術統合化プロジェクト（ヒト・地球）、  
領域創成プロジェクトに加えて、寄付研  
究部門によりさまざまな教育研究活動が  
展開されています。

総括プロジェクト機構に2007年7月に、  
「学内研究連携ユニット」という仕組み  
が新たに誕生しました。本学には4000人

を越える研究者がいます。部局を越えた  
教育研究プロジェクトのアイデアがあっ  
たとしても、特に文系のように少人数で  
研究が行われる分野では、「同学の志」  
を見つけるのは容易ではありません。学  
内研究連携ユニットは、その手助けをし  
て、アイデアを教育研究プロジェクトへ  
と発展させてゆくいわば孵卵器の役目を  
する仕組みです。

10月1日に発足した数物連携宇宙研究  
機構は、世界トップレベル国際研究拠点  
として文部科学省に採択されたものです。  
このように、さまざまな仕組みが東京大  
学の分野横断型研究を支えているのです。



## 「知」を創出し、活用するために —— 知の構造化センター ——



**美馬秀樹**

大学院工学系研究科  
特任准教授

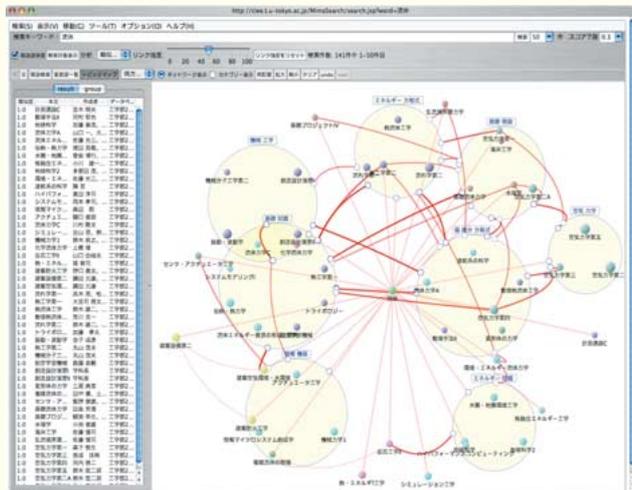
1,600万件と3万件……これらはそれぞれ、MEDLINE（医学・生命科学分野の文献データベース）に登録されている文献数、及び毎月のおおよその増加数（2006年時）である。ICT（情報通信技術）の発展、科学の拡大、専門分野の深化を背景に、生命科学分野のみならず、あらゆる分野において知識の量が爆発的に増加しており、非専門家はもとより専門家にとっても知識の全体像の把握が非常に困難な状況となっている。さらには、環境、エネルギーのような、地球規模での複雑で多様な問題が顕現化し、学際的、分野横断的に知識の活用を促す仕組みの構築がより重要性を増している。

このような問題に対し、東京大学では、知識や領域間、また、知識と人との「インターフェーシング」を行い、「知を構造化」することで、知的価値、経済的価値、社会的価値、文化的価値に結びつけるための方法論を構築し、成果を速やかに実装することを目的に、全学プロジェクトとして、知の構造化センター

（ネットワーク）を設立した。当センターでは、学術知識、ものづくり、企業経営、社会問題、メディア、文化・芸術等の様々な知識を収集、構造化することで、新たな知識を創出し、学術創成、経営、政策の支援等、分野を超えた知の活用を可能とする革新的技術を開発する。これにより、知の創造、分析、検索、活用からさらに高次の知の創造へと昇華する「知の螺旋の形成」を行う。高度な自然言語処理はもとより、次代の知識理解技術、情報通信技術の研究開発がその技術基盤となる。

先に開催されたセンター設立記念ワークショップでは、内外より200名以上という多数の参加者があり、参加者アンケートの集計結果と併せて、「知の構造化」及び当センターへの期待の高さがうかがえた。

今後、Wiki技術とMIMAサーチの融合によるリアルタイム動的構造化知識基盤の実現を始め、「進化する教科書」、「百学連関知識ベース」等、東京大学でしか実現し得ない“最先端構造化技術とハイクオリティな知識ソースの融合したネットワーク型知識基盤”、まさしく「知の構造化ネットワーク」の現実化（リアル化）を目指す。



MIMA サーチによる講義間の「インターフェーシング」：関連する講義やその重要概念が瞬時に把握でき、履修科目選択が効率的に行える。

## ジェロントロジー寄付研究部門 —— 安心で活力ある長寿社会の実現をめざして ——



**秋山弘子**

ジェロントロジー  
寄付研究部門 教授

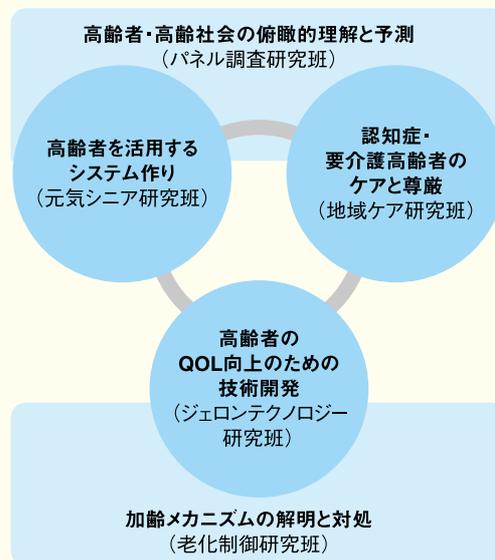
長寿先進国であるがゆえに他国に先駆けて顕在化している高齢社会の諸問題に、いかに対処するかはわが国の最重要課題の一つであり世界中が注目している。高齢社会の問題は多岐にわたる。労働に従事しない依存人口比率の上昇や認知症・虚弱高齢者の介護など深刻な問題が顕在化している一方、高齢者を社会資源と捉え新しい雇用や産業の誕生への期待も大きい。これらの課題は種々の要因が相互に関連しあっており、従来のような縦割りの学問領域を超えた高度の知識・技能・経験が必要と

なる。

ジェロントロジーとは、そうした高齢者や高齢社会全般に関わる諸課題を研究対象とする学際的学問である。総長室直轄の総括プロジェクト機構に属するジェロントロジー寄付研究部門は、全学の知を結集して安心で活力ある長寿社会、長生きを喜べる社会の実現に資する研究・教育の国際的拠点の形成をめざしている。老化のメカニズム、高齢者の生活変化、元気シニアの活用策、地域医療介護、工学的デバイスによる生活の質の向上、などの研究に平行し、毎月のセミナーを開催、2008年4月からは高齢社会を支える人材を養成するために分野横断的なジェロントロジー教育プログラムを開発予定である。

### ジェロントロジー教育研究の国際的拠点

#### 研究体制



#### 研究インフラ整備

- ・ジェロントロジーライブラリー
- ・サブジェクト（被験者・調査対象者）プール
- ・データ解析相談サービス
- ・テクノロジー相談サービス

#### 人材育成プログラム

##### 研究者育成プログラム

1. 分野横断型教育プログラム
2. 学際的研究指導
3. 若手研究支援事業
4. 国際活動支援事業

##### キャリア形成支援

- ・産官民団体との共同研究、ワークショップ
- ・インターンシップ
- ・コミュニケーショントレーニング

## 国際化 未来へ 柏国際キャンパス構想& 柏の葉国際キャンパスタウン構想

# 街をキャンパスに変える。 キャンパスを世界に変える。



### 磯部雅彦

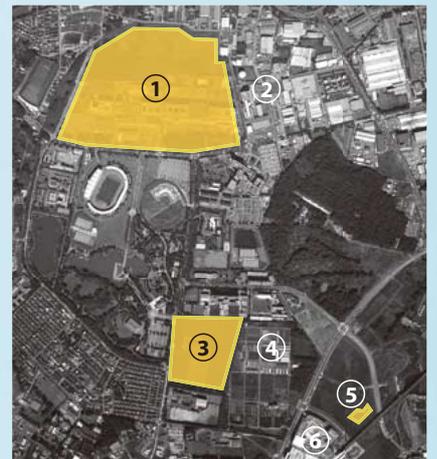
大学院新領域創成科学研究科 教授  
総長特任補佐(参与)

### 柏国際キャンパス構想の現状と 近い将来

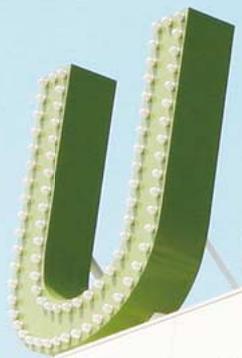
本学が学問の新たな発展を目指して柏に新キャンパスを展開するという議論は20年余前に始まりましたが、12年前の1995年にはキャンパス用地の一部が取得され、計画の実現に向けて大きな一歩を踏み出しました。1999年度から柏キャンパスへの移転が始まり、新領域創成科学研究科、宇宙線研究所、物性研究所と4つの研究センター（人工物工学研究センター、空間情報科学研究センター、高温プラズマ研究センター、気候システム研究センター）を合わせて7部局が昨年までに移転を完了しました。海洋研究所も2年余り先に中野から移転するように建物の準備を進めており、また生産技術研究所千葉実験所の機能も移転することになっています。これらにより柏キャンパスは、多くの全国規模での共同利用施設を擁し、大学院研究科と研究所・研究センターを中心として様々な学問分野をカバーする、より研究に重心を置いたキャンパスになろうとしています。柏キャンパス設立の理念である学融合、すなわち様々な既存の学問分野を融合して新たな学問を創り出すという目的を実現し、教育研究活動を活発化するための大きな目標が、アクションプランに掲げられた柏国際キャンパス構想です。この実現のために、まず柏、柏Ⅱ、駅前の3か所か

らなるキャンパスの土地取得を完了することになっており、最終的に本郷や駒場に匹敵する広さになります。そして、そこに世界をリードする研究施設を整備するための具体的検討を進めており、国内外からの研究者や留学生を集めて教育研究を発展させる計画です。すでに、サステイナビリティ教育プログラムが始まり、世界トップレベル研究拠点プログラムに「数物連携宇宙研究機構」が採択されました。これらを支えるために、外国人研究者や留学生がいつでも滞在できるように、インターナショナル・ロッジの建設計画を来年度末の完成を目指して進めたり、柏インターナショナル・オフィスを開設し、外国人の来日準備から帰国後までワン・ストップ・サービスができるようにする試みも行っています。柏キャンパスは本郷、駒場と合わせた本学の3極構造の新たな一極となろうとしています。さらに、それだけでなく、他大学、自治体、産業界、地域とも協力し、支援を得ながら、柏の葉キャンパス駅の周辺地域がキャンパスを中心とする街として発展するように努力しています。進化する柏キャンパスに是非ご注目下さい。

東京大学三極構造のひとつ、柏キャンパスでは現在、着々と新たな試みが始まっています。「柏の葉」の街全体をキャンパスに作り変え、そのキャンパスに国際的な「世界」を作り上げるという試み……まったく新しい大学モデルの出現は、もう、すぐそこまで来ています。



1. 東京大学柏キャンパス
2. 東葛テクノプラザ・東大柏ベンチャープラザ
3. 東京大学柏Ⅲキャンパス
4. 千葉大学環境健康フィールド科学センター
5. 東京大学柏の葉駅前キャンパス (予定)
6. 柏の葉キャンパス駅



Urban Design Center



## 北沢 猛

大学院新領域創成科学研究科 教授  
柏の葉アーバンデザインセンター長

### 柏の葉国際キャンパスタウン構想

国際キャンパスタウン構想は、東京大学と千葉県、柏市、千葉大学の共同研究により描こうとしている柏キャンパス周辺の将来像です。対象地域は13km<sup>2</sup>で、大学や研究機関、公共施設、工業団地が立地し、新興住宅地と古くからの農村集落が混在しています。2005年秋、つくばエクスプレスが開通して秋葉原から30分と立地条件が格段に向上し、沿線開発も本格化しました。おおたかの森、江戸川、利根川、豊かな自然環境が残っています。こうした学術と産業、生活と文化、自然という資源を活用しさらなる相乗効果を構想しています。これまでの学術都市は国の主導などでしたが、柏の葉は構想から市民や企業、自治体、大学の「公民学」連携で進めている点に特徴があります。

まちづくりの理念として(1)自然と共生する環境都市、(2)産業や活動を生む創造都市、(3)国際的な学術都市、(4)多様な交通の総合管理、(5)コミュニティ

形成、(6)先進のアーバンデザイン(7)エリアマネジメント(8)社会実験都市を提案しています。2006年の基礎調査と東京大学や他機関の研究や実証実験の成果をもとに、基本方針と目標、戦略プロジェクトを研究していますが、可能なものは順次具体化しています。また、構想について広く情報や意見を交換する場として東京大学の提案により「柏の葉アーバンデザインセンターUDCK」が設置され、自治体と開発者、鉄道会社、柏商工会議所、企業、研究者や芸術家、デザイナー、そして市民が参加しています。地域と東京大学の関わりは研究だけではなく、環境デザイン統合教育プログラム「都市環境デザインスタジオ」は、柏の葉を課題にまちづくりを提案するもので、当構想の学生版とも言えます。テーマは『新しい公共空間』でしたが、その成果を公開したところ、幾つかは実現にむけて関係機関のプロジェクト研究会が始まっていま

す。また、柏市とUDCKが共催する地域リーダー育成の「まちづくりスクール」は多くの教員や学生が支援をしています。

これまで大学と社会の関係は研究者がそれぞれに地域や国、企業と構築する個別提携でしたが、柏の葉国際キャンパスタウン構想では、計画関連の専門領域に限らず広い知のネットワーク連携が構築できるのではないかと考えています。関心のある研究者の参加を呼びかけています。柏は、城下町や宿場町という歴史都市ではありませんが、高度成長期の郊外都市、豊かな自然が残る田園都市と多様な顔を持っています。課題も多様ですが、可能性や進取の気風に富む都市です。そこに、国際的な研究や学術、市民や企業の新しい活動が創造される期待があり、大学の知が大きな役割を果たすと思いま



## すでに動き始めた「柏の葉国際キャンパスタウン構想」具体例



写真転載：VELO TAXI Japan HP より

### 柏の葉ペロタクシー

つくばエクスプレス柏の葉キャンパス駅を中心とした柏の葉国際キャンパスタウン・エリアで、新しい交通手段『ペロタクシー』の実験走行を今年10月から予定しています。VELO（ペロ）はラテン語で自転車を意味します。1997年にドイツの首都ベルリンで、「人と環境にやさしい交通手段」として開発された屋根付き三輪自転車タクシーです。鉄道やバスなど公共交通を補完する交通手段としてだけでなく、環境問題・高齢化社会問題・地域経済の活性化などの解決策の一つでもあると言われています。柏の葉公園内や千葉大学構内、本学柏キャンパス構内も走行実験ルートと設定されています。



柏の葉アーバンデザインセンターの外観

### 柏の葉アーバンデザインセンター(UDCK)

新しい時代に対応する都市、環境と生活のあり方を模索するために『柏の葉アーバンデザインセンター（通称:UDCK）』が創設（2006年11月）されました。柏の葉をフィールドとしてまちづくりを議論し、さらに実証実験を支援する場として機能しています。本学大学院新領域創成科学研究科北沢猛教授がセンター長を務め、運営委員会は東京大学、千葉大学、柏市、田中地域ふるさと協議会、柏商工会議所、首都圏新都市鉄道、三井不動産株式会社により構成されています。まちづくりリーダーを育成するための「UDCKまちづくりスクール」、東京大学「都市環境デザインスタジオ」、地元企業の方や地域住民、専門家等が憩う「Kサロン」などが行われています。

<http://www.udck.jp/>



十坪ジムの様子

### 十坪ジム

「十坪ジム」とは、東京大学大学院新領域創成科学研究科附属生涯スポーツ健康科学研究センターと柏市が共同で始めた事業のひとつであり、十坪ほどのスペースにマシンを設置して、健康づくりを目的としたトレーニングをするジムです。本学小林寛道名誉教授が開発した「認知動作型トレーニングマシン」は、ゆっくりとした動作で筋肉と脳に刺激を与え、高齢者でも無理なく運動できます。2006年10月からスタートした十坪ジムは、2007年5月の時点で7ヶ所に開設されており、第2段階としては拠点ジムを補完する20箇所を設置します。最終的には、市内40箇所に設置する予定です。



柏の葉キャンパスエリアの模型（UDCKにて常時展示）

### ASNET 「日本・アジアに関する教育研究ネットワーク」の推進

たくさんの研究室がそれぞれで日本やアジアとかかわる活動をしています。お互いに協力すれば、たとえば理系と文系で補いあえば、もっとすごいことができるはず。そう考えた有志によるボランティアな活動として2001年にASNET (Asian Studies Network: 日本名「日本・アジアに関する教育研究ネットワーク」) は発足しました。どの部局に、どういう研究をしている人がいるかをみつけた

めのデータベースを作りました。また、情報を共有できるメーリングリストを作り、これは週刊のメールマガジンへ発展しました。2005年からは本部の進める事業となり (ASNET推進室の設立)、これを機に教育活動「日本・アジア学講座」(大学院生対象) をはじめました。所属も専門も異なる先生達が共通のテーマ (「アジアにおけるリスクと国際協力」など) で講義するリレー式科目を中心に10科

目を行っています。また、今年には国際シンポジウム「アジアと語る希望・幸福」を開催します。希望・幸福をテーマにしてアジア各地の知と日本の経験を結びつけたいと思います。

ASNETはたくさんの人に支えられたバーチャルなネットワークです。それを活かして、アジアに位置する日本・東京大学特有の学際・国際化を担っていきたいと思います。



詳しい活動はホームページで。(メルマガ購読もできます)  
<http://www.asnet.dir.u-tokyo.ac.jp>



柏の葉駅周辺の電柱に設置された見守りカメラ

### 自立的移動支援プログラム

本学が中心となって設立された「特定非営利活動法人 柏の葉キャンパスシティITコンソーシアム (KACITEC)」は、産学官の有機的な連携の下、ITの活用による次世代の生活・産業支援システムの研究・開発・実用化を目指し、柏の葉キャンパス駅周辺において様々な実証実験を重ねています。その一つに、本学大学院新領域創成科学研究科近山隆教授により研究されている自立的移動支援プログラムがあります。5つのサブプロジェクトから構成され、ユニバーサルデザインが確保された安心安全なまちづくりを目指すものです。多数カメラの追跡によるセキュリティシステムにより、犯罪を抑制し移動時の安全が24時間確保されたまちづくりを目指しています。



オンデマンドバス実験の様子

### オンデマンドバス・システム

オンデマンドバスとは、乗客がWebや携帯電話により、到着時間および乗車場所を指定し、予約できる乗り合い型バスです。予約の可否は即座に利用者に通知されます。本学大学院新領域創成科学研究科大和裕幸教授は柏市と雲仙市での実証実験を行い、実用化への見通しを得ました。2007年は、GPS搭載型携帯電話を介して、乗客とのコミュニケーションを充実することによって、さらに個別のニーズに的確に対応するシステムを検討します。バス停を固定する必要が無く、音声認識により予約できるので、高齢者・身障者にも便利なシステムです。



柏の葉駅周辺で開催されたTX サイクルフェスタ

### レンタルサイクルシステム

柏の葉キャンパス駅周辺では、自転車によるまちづくりが進められています。2007年5月19日にはTXサイクルフェスタの一環として、本学大学院工学系研究科羽藤英二准教授により自転車とまちづくりに関するワークショップが行われました。市民、学生、行政、研究者、さらには高校生も参加して、自転車まちづくりのために必要な施設、走りやすい道路や気持ちのいい環境について様々なアイデアを生み出しました。柏の葉サイクルマップの作成や共同自転車システムの導入に向けた具体的な検討を進めています。

具体例説明文/UDCKディレクター 丹羽由佳理



柏の葉サイクリング Style (都市環境デザインスタジオにおける学生の提案)

## 東京大学の学生スポーツ国際交流

本学の課外体育活動において、中心的役割を果たしている東京大学運動会では、本学創立130周年記念事業の一環として、「東京大学創立130周年記念国際交流スポーツ大会」を企画しています。

漕艇部では、9月23日、埼玉県戸田市戸田公園において、ブリティッシュコロンビア大(カナダ)・ソウル大(韓国)・京大との4大学対校レガッタを開催しました。また、硬式野球

部・ハンドボール部・剣道部においても、それぞれソウル大学生を招聘し、対校戦を行います(7月~12月中、学内各所)。さらに、9月21日には薬学系総合研究棟において、本学招請大学学生と本学学生とのパネルディスカッションを中心とした文化交流プログラムも行なわれました。これらの企画により、スポーツ技術の研鑽及び学生間の国際交流の促進を図っています。

これからも上記運動部含めいくつかの運動部ではそれぞれ国際交流試合・海外遠征を立案・継続していく方向です。また近年外国人留学生の中で運動部に入部する学生が増加していることもあり、今後の課外体育活動も国際色を帯び、より活動に広がりを持つことになるでしょう。



4大学対校レガッタ・130周年記念親善レースでは、ブリティッシュコロンビア大学がトップでゴールし、本学は京都大学と熾烈な2位争いを演じたものの惜しくも3位となった



活発な議論も交わされた文化交流プログラム

多様化 未来へ  
男女共同参画室

# 東大が描き出す 女性研究者の近未来



村嶋幸代

大学院医学系研究科 教授  
男女共同参画室長

## 東大男女共同参画室とは？

平成18年4月に創設された総長直轄の室です。「女性研究者の研究継続の保障」と「女性研究者の裾野の拡大」を重点に、教職員と事務部門とが協働しながら3つの部会で進めています。即ち、女子学生の進学を拡大しようという「進学促進部会」、妊娠・育児等の期間を働きやすくする「勤務態様部会」、保育園や休憩室・街灯等を整備して働きやすい大学にする「環境整備部会」です。

平成18年度は東京大学男女共同参画基本計画(平成15年12月決定)をバージョンアップする「推進計画」を策定しました。

平成19年度には、科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル育成」に東大モデルが採択されました。

## 東大モデル「キャリア確立の10年」支援プランについて

「キャリア確立の10年」は、ちょうど、博士課程から教員になっていく時期をさします。この時期は研究者としての自己の確立を図ると同時に、妊娠・出産・育児等のライフイベントが重なりやすい時期でも有ります。

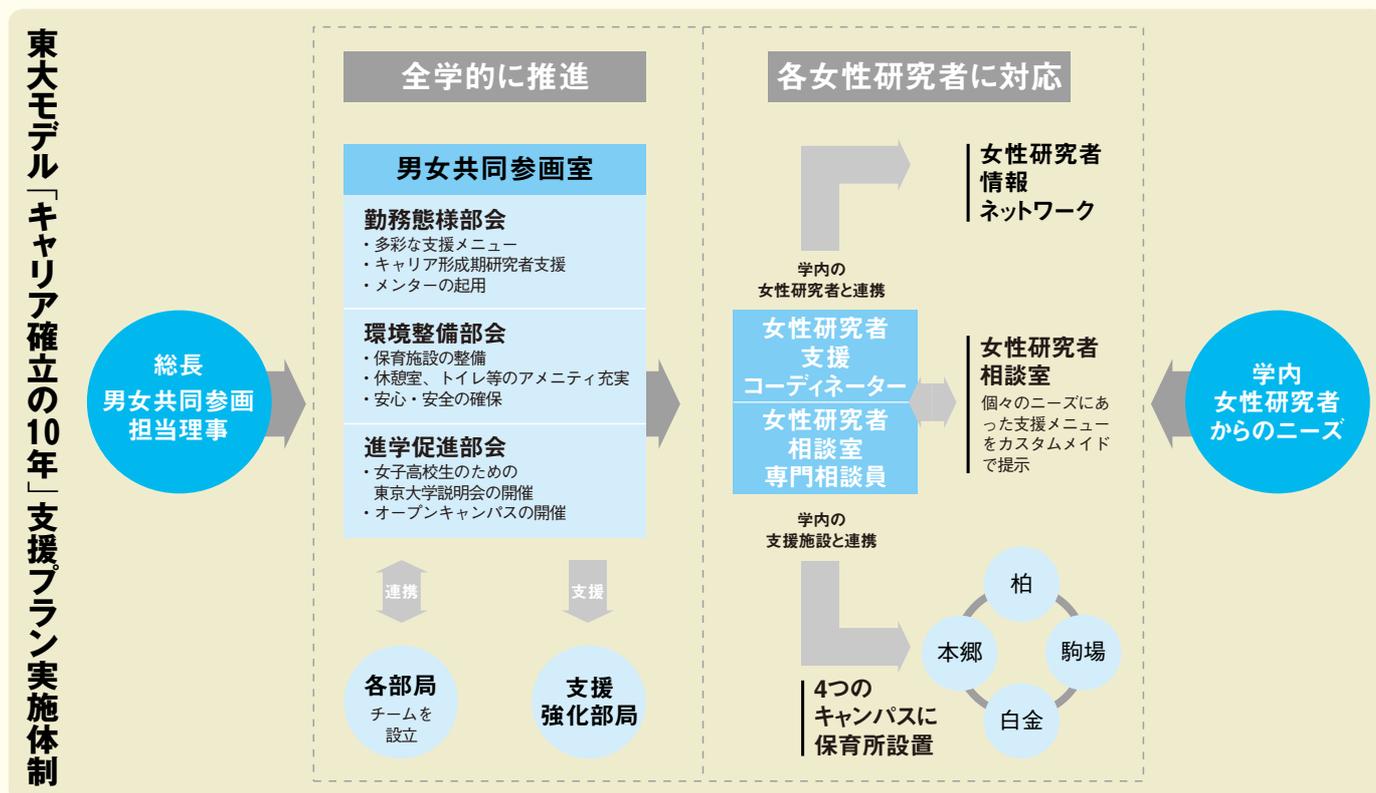
この時期の支援を重点に、振興調整費で、女性研究者支援コーディネーターと女性研究者相談室専門相談員を専任教員として採用しました。前者は、各部局との調整をしながら、このプランを推進します。後者は、「女性研究者支援相談室」を開設し、この時期特有の課題について相談に乗っていきます。

男女共同参画時代においては、多数の女性研究者の誕生が俟たれています。本学ではこの流れを促進するべく、女性研究者のキャリア確立をサポートする方策がすでに展開され始めました。近未来の東大キャンパスでは、多くの女性研究者が活躍していることでしょう。

二人の専任教員と、さらに専任事務職員を得て本学本部棟(本郷キャンパス)9階に「男女共同参画オフィス」を新設しました。支援プランでは、学内保育施設(本郷・駒場・柏・白金の4キャンパスに予定)の整備、学内外の女性研究者等のデータベース構築・東京大学女性研究者白書(仮称)の発行等を行います。来年は、世界の女性研究者を招き、講演会も予定しています。

## 男女共同参画室の活動がもたらすもの

女性も男性も働き易い、自己実現できる社会づくりです。キーワードは、「多様性」と「ワークライフ・バランス」。東京大学が、世界のトップクラスの大学であるためには、男女共同参画が必要不可欠ですが、その戦略を立案・推進していくのが、室の使命だと考えています。





**五十嵐 隆**  
大学院医学系研究科  
教授

### 東大病院 「いちょう保育園」の開園

附属病院で働く女性の子育て支援の一環として、本年4月1日より東大病院「いちょう保育園」が開設されました。附属病院の教職員の生後9週から小学校就学前の子どもの対象として

います。定員は0歳児9名、1～2歳児12名、3歳以上11名です。保育日は月～金曜日、開園時間は7～20時で、子育てをする病院教職員の勤務に便利な時間帯になっています。保育園の建物は平屋建てで、延べ床面積は430㎡です。2歳以上の子どもと0歳、1歳の子どもが別々に保育できるように、3つの保育室があります。8月現在、0歳児6名、1～2歳児10名、3歳以上8名の入園があり、7名

の保育士が担当しています。秋には1歳児を中心とする8名程度の入所が予定されています。夏に流行する手足口病などの感染症にかかる子どもが今年は少なく、ほとんどの子どもがお休みすることなく通っています。同保育園が附属病院における男女共同参画の大きな助けになっており、これからもその役割が増すと思われます。



いちょう保育園開園時の様子



**窪川かおる**  
海洋研究所 教授

### 海洋研究所の 女子中高生向け 「白鳳丸」見学会

文部科学省「女子中高生理系進路選択支援事業」による「海が好き！オーシャンサイエンスで活躍する女性研究者たち」の一環として、本年3月27日・28日に海洋研究開発機構の協力のもと、晴海埠頭停泊中の学術研

究船「白鳳丸」見学会を実施した。女子中高生をおもな参加者とし、講義と船内ツアー、さらに甲板で実際に採水やプランクトン採集をし、実験室で分析・観察を行なった。昼食時は全員が船内食堂に会し、楽しく交流した。事業では見学会に先立ち、5都府県の高校で女性研究者・大学院生による出張授業を行った。この授業と見学会の目的は、女子中高生に海洋科学の知識と体験を持ってもらい、女性もフィールド科学に進学できることを直接伝えることにある。出張授

業及び見学会での質疑応答やアンケート結果では、この事業が海洋科学の知識の普及活動を促進し、次代の海洋科学を担う女子高校生の人材の掘り起こしの一助になった様子がうかがえた。また、この事業は男女合わせて多くの教職員、ポスドク、大学院生等が関わり、協力し合い、男女共同参画の視点からも意義深い取り組みであった。今後も本事業を継続し、女性が理系を目指す環境づくりにさらに貢献していきたい。



白鳳丸 4,000 トンに乗船する参加者



甲板上で直径3mの大型ネット（右側）の説明を聞く参加者



**横山広美**  
大学院理学系  
研究科 准教授

### 10年後の未来と出会う 「女子高生のための サイエンスカフェ本郷」

「ディズニーランドよりも楽しかった！」という感想は、女子高生にとって最高の賛辞であろう。

理学系研究科は「高生のためのサイエンスカフェ本郷」を年2回の予定で開催している。このイベントは大学院生や若手研究員のディスカッションから

理学の魅力をよりダイレクトに感じてもらうことを目的に、本年2月からスタートした。

特に6月17日に開催した第2回目では、女子高生に理学系の魅力を訴えると同時に、女子生徒に特有の理系進学への不安を解消してほしいという教員の強い思いから、女子高生に限定したサイエンスカフェ本郷を開催し、55人の女子高生が参加した。冒頭の言葉はその時の感想である。

女子高生たちは、第一線で活躍する大学院生との交流に感銘を受け、理系進学に対する漠然とした不安を解消したようで

ある。10年後の自分に重ねることが出来るモデルケースとなる院生たちとの交流は、女子高生に大きなインパクトを与えたと感じている。

学問の多様性は、多様な人がいてこそ実現する。この理念のもと、理学系研究科は今後も女子高生へのアピールを続けていきたいと考えている。



サイエンスカフェで談笑する女子高生たち

## 多様化 未来へ バリアフリー支援室

# 「心のバリアフリー」の 実現をめざして



**平尾公彦**  
副学長  
バリアフリー支援室長

東京大学では、大学を構成する様々な人々が活動しています。教員や事務職員、技術職員、大学病院には医師や看護師がいます。それぞれ教育研究活動、医療活動に従事しています。また、東京大学は多様な人材を学生、大学院生、あるいは留学生として受け入れ、世に送り出してきました。この多様性こそが東京大学の強みでもあります。当然のことながら、障害をもつ学生を受け入れ、障害をもつ人を雇用しなければなりません。小宮山総長の強いリーダーシップのもと、本学は世界の知の頂点を目指しています。研究教育面で世界のトップクラスを目指すのであれば、そこに集う人々は精神的にもたくましく、キャンパスは可能な限り全ての人々にやさしいものでなければなりません。障害をもつ人と共に学び、働く環境を実現することが理想です。

本学には、平成16年にバリアフリー支援室が設置され、障害をもつ人のためにさまざまな活動を展開してきました。障害をもつ職員を含め、専門知識を有するスタッフが常駐し、障害をもつ学生の相談窓口ともなり、指導する担当教員へのアドバイスや情報提供を行っています。バリアフリーに関する全学的な理解や積極的な取り組みや啓発活動も進めています。支援室のスタッフらの献身的な活動に支えられて本学のバリアフリー化は少しずつ、しかし着実に進展しています。本学は法人化以降、障害者に雇用の門戸を開くことを義務付けられています。知

る障害者のメンバーによる環境整備チーム、聴覚障害者のメンバーによる自転車整理スタッフ、視覚障害者のメンバーによるヘルスキーパーなど、本学独自の新たな雇用を生み出してきました。しかし、障害者雇用促進法で定められた雇用率は、現在、未達成です。雇用率の達成は最重要課題の1つです。

建物や施設のバリアフリー化もここ何年かで大いに改善されました。歴史的な建物でもバリアフリー化は進んでいます。キャンパスのバリアフリー化が一目でわかるバリアフリー・マップも早急に作成する必要があります。

キャンパスのバリアフリー化とともに進めなくてはならないのは、大学を構成する人々の心の「バリアフリー化」だろうと思います。心の「バリア」とは知識不足や誤解、偏見、あるいは経験不足などが原因で、障害をもつ人と対等につき合えないことです。「知らないこと、知ろうとしないこと、理解しようとしないうこと」もバリアでしょう。心の「バリアフリー」とはこのような心の「バリア」を解消することです。学生には多様な人々と出会い、できるだけ大学に長くいて大学のもつさまざまな顔に接してほしいと願っています。知性と共に感性をみがいてほしいものです。世の中は評価ばかりですが、一人の人間の秘めている底知れぬ可能性を、たった一つのパラメータ、またはわずかな「ものさし」で評価することは決してできるものではありません。この思いは人生での経験を重ねるほど強まるばかりです。心の「バリアフリー」は人を評価する「ものさし」の多様化につながることでしょう。

本学ではバリアフリー支援室が中心となって、合理的配慮に基づくバリアフリー支援を進めています。物心両面での支援が求められるバリアフリーの現場では、全学的な「心のバリアフリー」をめざして、大学多様化への道が切り拓かれていこうとしています。

本学には、障害者問題やバリアフリーを専門としている研究者がいます。教育研究機関としての独自性と特殊性を生かす形で、今後も東京大学ならではのバリアフリー化を推進したいと考えています。近い将来、バリアフリーの面でも世界の大学のモデルとなることを目指しています。



聴覚障害者メンバーによる施設部自転車整理スタッフ。本郷キャンパス内の自転車を整理してくれている



本年度入学式では耳が聞こえず目が見えない福島智准教授（先端研）が祝辞を述べ手話通訳が行われた



バリアフリー支援室でのひとコマ。障害の有無にかかわらず、多くの学生がここに集まってくる



## 快適化 未来へ 学生支援センター構想

# 「学び」のアメニティを 作り出すために



浅島 誠  
理事・副学長

「人間教育」と学生の社会性の向上という視点から、学生サービス・学生相談・キャリアサポート等学生支援体制の抜本的強化（学生支援センター構想）、それに対応する事務体制の整備・再配置など、現在、いくつかの構想を進めています。

今の本郷キャンパスにおける学生サービス・学生相談機能は、御殿下記念館や安田講堂北側1・2階などに分散され、集中的に学生サービスを受けることができにくい現状があることから、学生や教職員からも不備が指摘されています。

そのために、専門相談諸機関が連携して多面的に学生支援にあたる体制を構築するとともに、本郷キャンパス中央（安田講堂周辺）の地域に学生支援・相談の機能の集中化が図れるよう①学生サービス窓口の集中化②学生相談スペースの拡充③学生相談窓口の連携④学生談話ロビー・交流スペースの拡充、そして⑤

学生の様々な相談や問題に対して迅速かつ適切な対応ができるように「なんでも



相談窓口」の設置といった改善策を検討しています。

その具体案としては

### 【御殿下記念館の改修】

- ①学生サービス機能の充実や体育施設の管理等を集中的に行う組織を置く
- ②学生の生活に直接関係する授業料免除、奨学金、宿舎等の学生支援を目的とした組織を配置し、さらにバリアフリー支援室を置く
- ③本郷地区の学生にとって交流スペースが少ないこと等を考慮した、学生談話ロビー、学生のための多目的室等、学生サービスの機器等を配置する

### 【安田講堂内の改修】

- ①「なんでも相談窓口」を設置する
- ②落ち着いた雰囲気の中で相談に乗ってほしい学生等のための相談施設である学生相談所、ハラスメント相談所、キャリアサポート相談室等の充実を図る

より効果的な高等教育を実現するためには、メンタルケアやキャリアサポートなど多角的な学生サービスをも含めた「キャンパス環境の充実」がキーポイントとなります。現在、本学ではそれらのサービスを集約化し、より充実させていこうという動きがあります。未来の大学像はこんなところにも示唆されています。

などの項目が挙がっています。

今後、現在、第2本部棟にあって、安田講堂周辺地域とはかなり離れている留学生関係の相談・支援窓口についても対応していきたいと考えています。

### キャンパスを学術の香り漂う空間に——知のプロムナード

本学では、創立130周年記念事業の一環として「知のプロムナード」の整備を始めました。これは、本学の歴史や研究成果を活用した「ストーリー性を持つ散歩道」を本郷、駒場、柏、白金の各地区キャンパスに作り上げようというプロジェクトです。

すでに、「最新の海底地震計」、「日本初の人工衛星『おすみ』の模型（1/2モデル）」など、本学の研究成果がプロムナード各所に配置される予定となっており、さらに、かつては警備の番人が詰めていた「番所（赤門の左右脇）」などもプロムナードのポイントとして公開される予定となっています。また、先頃、「知のプロムナード」第一弾として、赤門とコミュニケーションセンターの間に小柴昌俊特別荣誉教授ゆかりの「光電子増倍管」が展示されました。（写真）

このプロジェクトによって、本学の構内には「学生・教職員の語らいの空間」あるいは「思索に適した静謐の空間」が現れ、キャンパス環境の快適性は格段に向上することでしょう。



光電子増倍管。目には見えない弱い光をとらえることのできる超高感度光センサー

# 130周年記念イベント一覧

詳しい情報は「創立130周年記念事業HP」で。  
<http://www.130out.pr.u-tokyo.ac.jp/index.html>

## 現在行なわれている130周年記念事業&これから行なわれる130周年記念事業

東大農学部歴史 農学生命科学研究科	平成18年12月～	朝日新聞社共催「知の拠点サミット」 本部企画	平成19年11月17日
福武ホール工事壁「考える森 ThinkingForest」プロジェクト 情報学環	平成19年6月4日～ 工事終了まで	医工連携の新たな発展 (第三回疾患生命工学センターシンポジウム) 医学系研究科	平成19年11月中旬
学生企画コンテスト 本部企画	平成19年9月～12月	国際シンポジウム「食の安全確保のための疫学研究と科学的リスク評価」 農学生命科学研究科	平成19年11月19日～20日
『異星の踏査—「アポロ」から「はやぶさ」へ』展 総合研究博物館	平成19年10月～12月26日	東大農場収穫祭 農学生命科学研究科	平成19年11月23日
展示「ユビキタスコンピューティング技術と博物館」展 総合研究博物館	平成19年10月～12月	物性研究所創立50周年記念事業 物性研究所	平成19年11月29日～30日
東京大学駒場博物館/2007年秋季特別展:「Musica ex Machina—機械じかけの音楽—」 総合文化研究科	平成19年10月20日～12月2日	公開講座「異星の踏査—「アポロ」から「はやぶさ」へ—」 総合研究博物館	平成19年11月7日～12月5日
比較芸術フォーラム= ワークショップ「音楽機械のための作曲」&コンサート「機械音楽の動向」 総合文化研究科	平成19年10月～12月	国際シンポジウム「森林と地球の未来 (仮題)」 農学生命科学研究科	平成19年11月頃
コンテンツ創造学科産学連携教育プログラム企画展:写真展「本郷零時3分」 情報学環	平成19年10月22日～11月8日	東大農場公開セミナー「食をめぐる問題 第4回」 農学生命科学研究科	平成19年11月頃
(第33回) 東京大学農学部公開セミナー 農学生命科学研究科	平成19年11月3日	貴重図書特別展示 附属図書館	平成19年11月1日～14日
東京大学シンポジウム「アジアと語る希望・幸福」(武田ホール、弥生講堂) 本部企画	平成19年11月3日～4日	学生国際交流サミット 本部企画	平成19年秋頃
日中学長会議 (ホテルニューオータニ) 本部企画	平成19年11月7日～9日	生産・環境生物学専攻公開セミナー「生産・環境生物学の現状と課題 (仮題)」 農学生命科学研究科	平成19年秋頃
東京大学第3回プレジデント・カウンシル 本部企画	平成19年11月8日～9日	国際シンポジウム「機械と音楽」 総合文化研究科	平成19年12月1日、2日
東京大学創立130周年記念式典 本部企画	平成19年11月10日	東京大学シンポジウム「環境生命科学における微生物・植物バイオテクノロジーの最先端」 生物生産工学研究センター	平成19年12月5日、6日
展示、講演会、見学会 史料編纂所	平成19年11月10日	IR3S New Delhi Research Unit @TERI kick off Meeting 本部研究機構等支援グループ	平成19年12月5日、6日
東洋文化研究所公開講座「アジアを知れば世界が見える—アジア界」 東洋文化研究所	平成19年11月10日	クリスマスコンサート 総合文化研究科	平成19年12月中
(第2回) 東京大学教養学部選抜学生コンサート 総合文化研究科	平成19年11月10日	東京大学ソウル大学対校記念スポーツ大会 (剣道) 本部・東京大学運動会	平成19年12月下旬
工学系研究科フェロー称号授与式 (工学部8号館) 工学系研究科	平成19年11月10日	世界のスーパー女性研究者シンポジウム 本部企画 (男女共同参画室)	平成20年2月～3月
東アジア四大学フォーラム—共通文化の創造をめざして 本部・総合文化研究科	平成19年11月11日～12日	シンポジウム—ヒトと動物の感染症研究における疫学的アプローチ 農学生命科学研究科	平成20年2月
GUPHA (Global University Program in Healthcare Architecture) Forum 2007 (ヘルスケア建築におけるグローバルな大学間プログラムフォーラム2007) 工学系研究科	平成19年11月12日～14日	(第3回) 東京大学教養学部選抜学生コンサート 総合文化研究科	平成20年3月中
先端機能材料デバイスラボラトリーズ オープンフォーラム 2007 工学系研究科	平成19年11月16日	特別展示「鳥のピオソフィア—山階コレクションへの誘い」(仮称)展 総合研究博物館	平成20年3月末～5月末

## すでに行なわれた130周年記念事業

- 東京大学創立130周年記念事業開始宣言
- 総合研究博物館特別展示「東京大学コレクション—写真家上田義彦のマネリスム博物館」展 ●東京大学インド・フォーラム
- 東京大学第1回プレジデント・カウンシル ●社会科学研究所「世界における社会科学的研究の現状と展望」 ●朝日新聞社共催「知の拠点サミット」 ●東洋文化研究所公開講座「アジアを知れば世界が見える—アジアの歴史」 ●「知の構造化」ワークショップ ●サンマイクロシステムズ スコット・マクニリー会長講演会 ●サンゴ再生技術による地球温暖化防止ならびに生物多様性の保護についての専門家会議 ●東洋文化研究所(第2回) アジア古籍保全講演会 ●社会科学研究所創立60周年記念講演会 ●サステイナビリティ学連携研究機構(IR3S) 国際研究型大学連合(IARU) 公開シンポジウム—資源と環境を支える地球と人類の未来— ●国際シンポジウム「火山噴火罹災地の文化・自然環境復元—アウグストゥスの別荘?または神域?—」 ●シンポジウム「知の構造化と図書館・博物館、美術館、文書館—連携果たす大学の役割」 ●食の安全研究センター設立記念国際シンポジウム「食の安全を担う科学研究の新たな展開」 ●東京大学運動会ヨット部世界選手権出場 ●東京大学臨床展開研修シンポジウム—ベンチからベッドサイドへ—そして社会へ ●卒業設計合同公開講座:東工大×武大×東大 ●(第12回) トップフォーラム ●(第1回) 東京大学教養学部選抜学生コンサート ●囲碁講演会「囲碁の魅力—囲碁で養う考える力」 ●アグリバイオインフォマティクス・

- シンポジウム—バイオインフォマティクスを利用した農学生命科学研究の新たな展開— ●東京大学駒場博物館/自然科学博物館所蔵品展「測る人・描く人」 ●東京大学駒場博物館/美術博物館 創造の広場(ピアッツァ) イタリア ●公衆衛生国際シンポジウム2007 ●海外先進教育実践支援プログラム:国際シンポジウム「国際標準の学部初年次教育実現に向けて—教員と職員の新しい連携の形—」 ●FRESH START@駒場 ●東大農場公開シンポジウム「ストレス条件下における農業生態系の管理と持続的農業」 ●東京大学公開講座「グローバルイノベーション」 ●新入生歓迎特別講演会 ●生命科学教育支援ネットワーク:(第4回) 東京大学の生命科学シンポジウム ●東洋文化研究所特別公開セミナー ●イタリア共和国ロマーノ・プロレディ首相講演会「イタリアと日本—両国の魅力、そして共通課題への挑戦—」 ●東京大学第2回プレジデント・カウンシル(ロンドン) ●大江健三郎氏講演会「知識人になるために」 ●シンポジウム「21世紀ヒューマン・セキュリティの確立を目指して」 ●東京大学の英語教育:改革の道程と今後の展望 ●特別展示「遣臣と女神—メソポタミア原始農村の黎明」展 ●展示「超高度アーカイブプロジェクト新規収蔵建築標本資料コレクション」展 ●日本関係清代檔案をめぐる国際研究集会 ●シンポジウム「イネのバイオエタノール化による持続的社会的構築」 ●駒場IIリサーチキャンパス キャンパス公開2007 ●国際ウイゲントゥイン・ワークショップ—規則遵守のパラドックスをめぐる— ●堀場国際会議「数論機

- 何学におけるp進的側面」(玉原国際セミナーハウス) ●公開講座「植物・動物・社会—西アジア考古学からみたドメスティケーションの始まり」 ●(第32回) 東京大学農学部公開セミナー「農学を創った人、農学が創ったもの」 ●APRU/AEARUリサーチ・シンポジウム「地震・津波・火山噴火とその災害の諸相の多様性」 ●知の構造化センター設立記念ワークショップ—東大が知を再構成する— ●UTフォーラム2007 イン・ソウル ●国際学生フォーラム2007 ●東京大学教養学部ピアノ演奏会 ●史料編纂所附属画像解析センター開設10周年記念研究集会 ●国際シンポジウム International Symposium on Advanced and Integrative Life Sciences ●イェール大学サマーセッション歓迎会 ●堀場国際会議「ユビキタスマディア:アジアからのパラダイム創成」 ●花連—歴史と夢— ●堀場国際会議「独創的研究の神髄をコーンバーク親子から学ぶ」 ●東京大学ソウル大学対校記念スポーツ大会(野球) ●社会科学を語る夏のワークショップ ●FSフォーラム「宇宙太陽発電システムシンポジウム」 ●文の京・大いなる学びシリーズ「第1回 ひとの顔/まちの顔」 ●イェール大学サマーセッション送別会 ●乗鞍サマースクール50周年(SS-50) 記念会 ●中国物権法シンポジウム ●公開講座「130th Anniversary Summer School 東大の森へ行く」 ●東京大学経済学部とリーマンブラザー証券による「金融のグローバル化」に関するパネル・ディスカッション ●東京大学 IBM Day ●生命科学ネットワーク・シンポジウム2007 ●国際

- 交流スポーツ大会文化交流プログラム ●東大農場公開セミナー「食をめぐる問題 第3回」 ●東京大学公開講座「カ(チカラ)」 ●記念レガッタ ●「東京大学アントレプレナープラザ」開業記念式典 ●第3回東京大学教養学部ピアノ演奏会 ●人工物工学研究センター:国際コロキウム「デザイン科学—創ることと分ることの本質を探る—」 ●総合文化研究科附属アメリカ太平洋地域研究センター創立40周年記念:公開シンポジウムと国際研究セミナー「反米:その歴史と構想」 ●「法学部130年」シンポジウム ●特別公開シンポジウム「生き物文化史に関する講演」 ●学生企画コンテスト ●(第27回) 日本分子腫瘍マーカー研究会 ●読売新聞社共催「企業ナビフォーラム」 ●第2回ETH国際コロキウム ●(財) 応用微生物学研究奨励会設立50周年記念国際シンポジウム ●シンポジウム「食料とエネルギーに関する水問題」 ●展示「ユビキタスコンピューティング技術と博物館」展 ●IR3S 国際シンポジウム2007「アジアの循環型社会の形成を目指して」 ●東京大学ソウル大学対校記念スポーツ大会(ハンドボール) ●AEARUワークショップ ●JR東日本安全安心工学総括寄附講座シンポジウム「安心安全社会に何が必要か?」 ●哲学会研究発表大会 ●第31回東京大学伊豆・戸田マラソン大会 ●駒場博物館/自然科学博物館2007年夏休み企画特別展「はじめて出会う開拓の世界」



# 21世紀COEプログラムの今



## 矢野正晴

COEプログラム推進室長  
教授

21世紀COEプログラムは、2002年度からスタートしました。文部科学省が「大学の構造改革の方針」にもとづき「研究拠点形成費補助金」を措置して生まれたもので、わが国の大学に世界最高の研究教育拠点を形成し、研究水準の向上と世界をリードする創造的な人材育成を図り、世界に通用する大学づくりを推進するものです。数学、物理学、生命科学、材料科学、工学、社会科学、人文科学、複合領域といったあらゆる分野にわたっており、2004年度まで3か年にわたり公募されました。東大で採択されたのは28拠点で、全国274拠点の約1割に当たります。

いずれも5年間のプロジェクトであり、2002年度に採択された11拠点はこの3月に拠点形成事業を終了しました。多くの拠点で、優れた研究成果が目に見える形で出るようになり、国際競争力のある拠点としての地位を確立しました。とりわけ、東大が推し進めようとしている分野横断的・融合的な視点に立った新しい研究領域において、新しいカリキュラム、コース、センターなどを立ち上げた拠点も少なくありません。東大の研究水準は、21世紀COEプログラムの支援を受けてさら

に向上しています。自然科学関連の発表論文は質、量とも世界トップクラスです。また、文系では世界の著名な研究者が拠点集ってシンポジウムやワークショップに参加するなど研究教育の幅が大きく広がるとともに、今までになかった形の出版成果も生まれました。

多くの拠点で、リトリート (retreat)・専門英語教育など新しい教育方法の工夫により、幅広い視野を持つ人材の養成が行なわれています。また、各拠点に集まった多くの若手が研究者としての第一歩を踏み出す場を得ました。さらに、プログラム発足と同時に大学院生など若手研究者の短期海外派遣、諸外国の研究者の来訪、滞在がきわめて活発になりました。終了した拠点関係者の多くは、グローバルCOEプログラムの中で新たな拠点を形成し、これまでの成果をさらに発展させて行くことになり、すでに活動を始めています。

グローバルCOEは、21世紀COEと同じく5年間のプロジェクトですが、1拠点あたりの平均予算規模がほぼ2倍で、一層の発展が期待されます。東大では、大学院入学者の経歴の多様化、修生生のキャリアパスの多様化を目指し、キャリアサポート室も立ち上げました。また、大学院教育を格段に充実させるとともに、世界の公共性に奉仕するグローバルな人材養成を目指し、海外の研究者との交流や大学院生の派遣・受入を抜本的に飛躍させていく計画です。

●2002年度採択拠点

●2003年度採択拠点

●2004年度採択拠点

### [生命科学]

- 生体シグナル伝達機構の領域横断的研究
- 「個」を理解するための基盤生命学の推進
- 戦略的基礎創薬科学

### [医学]

- 脳神経医学の融合的研究拠点
- 環境・遺伝素因相互作用に起因する疾患研究
- ゲノム医学の展開による先端医療開発拠点

### [化学・材料科学]

- 動的分子論に立脚したフロンティア基礎化学
- 化学を基盤とするヒューマンマテリアル創成

### [情報・電気・電子]

- 情報科学技術戦略コア
- 未来社会を担うエレクトロニクスの展開

### [機械・土木・建築・その他工学]

- 機械システム・イノベーション
- 都市空間の持続再生学の創出

### [数学・物理学・地球科学]

- 科学技術への数学新展開拠点
- 極限量子系とその対称性
- 多圏地球システムの進化と変動の予測可能性
- 強相関物理工学

### [人文科学]

- 共生のための国際哲学交流センター
- 生命の文化・価値をめぐる「死生学」の構築
- 基礎学力育成システムの再構築

### [社会科学]

- 国家と市場の相互関係におけるソフトロー
- 先進国における《政策システム》の創出
- 市場経済と非市場機構との連関研究拠点
- ものづくり経営研究センター

### [学際・複合・新領域]

- 融合科学創成ステーション
- 生物多様性・生態系再生研究拠点
- 心とことば—進化認知科学的展開

### [革新的学術]

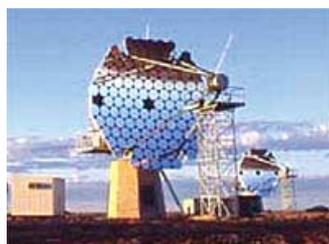
- 言語から読み解くゲノムと生命システム
- 次世代ユビキタス情報社会基盤の形成



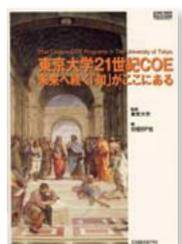
アサザが茂るトンボ池に飛来してきたハラビロトンボ (角谷拓)



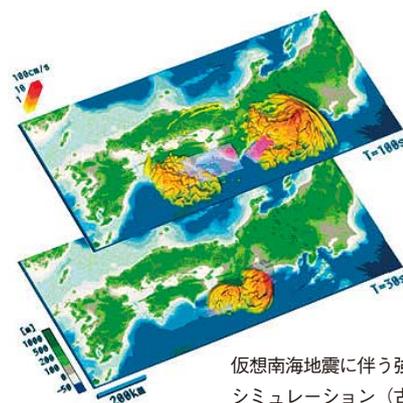
様々なシンポジウムが行なわれている



ガンマ線による天体高エネルギー現象の解明 (森正樹)



『東京大学21世紀COE』  
日経BP社刊



仮想南海地震に伴う強振動予測シミュレーション (古村孝志)

東京大学は、国外の著名な大学・研究機関において、本学の優れた研究成果を発表するとともに、相手方大学等との研究交流を通じて本学の国際的プレゼンスを高めることを目的に、平成12年（2000年）より、UTフォーラム（University of Tokyo Forum）を開催してきている。過去には、アメリカ合衆国（ボストン、シリコンバレー）、シンガポール、スウェーデン、中華人民共和国で開催し成功を収めている。

6回目となる今回のUTフォーラムは、平成19年（2007年）6月25日（月）、26日（火）の両日、大韓民国ソウル大学校、高麗大学校において開催された。

ソウル大学校においては、「人文学系」および「電気・工

学系」の2分野のフォーラムが開催され、それぞれ約120名、及び150名の参加があった。さらに、高麗大学校においては、「教育学系」のフォーラムが開催され、約150名の参加があった。また、両大学において、3分野の学生のフォーラムも並行して開催され、教員フォーラム、学生フォーラムともに成功裏に終了した。なお、本学からは、小宮山宏総長、浅島誠理事・副学長、武内和彦国際連携本部長のほか、学内10部局から21名の教員および37名の学生がフォーラムに参加し、ソウル大学校、高麗大学校の教員・学生と学術的、人的交流を深めた。

# UT Forum in



6月25日（月）・26日（火）の2日間、韓国・ソウルにて第6回UTフォーラムが開催されました。今回の会場はソウル大学校と高麗大学校の2大学。この第2特集では、両大学校総長と本学・小宮山宏総長との対談も含め、UTフォーラム2日間の内容を報告します。

## 【電気・工学系フォーラム】

### UT-SNU Forum: "Electrical Engineering and Electronics for Quality Life and Society"

安全で安心して暮らせる質の高い21世紀社会の実現のために、本学・電気系では、21世紀COEプログラムにおいて、システム、デバイス、マテリアルの各技術領域を跨いだシステムエレクトロニクスプロジェクト、ナノエレクトロニクスプロジェクトを立ち上げ、研究・教育を行ってきた。

この社会と生活の安全・安心を実現する「セキュアライフエレクトロニクス」のコンセプトをテーマに、工学系（電気系）フォーラムが6月

25日（月）に、ソウル大学校工学部ホールで150名以上の参加者を得て開催された。小宮山宏本学総長とLee Jang-Mooソウル国立大学校総長の挨拶のあと、保立和夫本学大学院工学系副研究科長が本学の21世紀COEプログラムの後継として採択されたばかりのグローバルCOEプログラムの紹介を行い、以下のサブテーマについて本学とソウル大学校の教員6名ずつにより12件の発表が行われ、最後に、Sul Seung-Ki工学部副部長が閉会の挨拶を行った。

社会と生活を監視する「センサ・センシング技術」については、保立和夫教授、Park Namkyoo准教授、そのデータを伝送処理・判断する「情報伝送・処理技術」について、坂井修一教授、柴田直教授、Shin Heonshik教授、Shin Yeong Gil教授、その判断を生活と社会にフィードバックする「エネルギー・環境・アクチュエーション技術」について横山明彦教授、堀洋一教授、Moon Seung-II教授、Sul Seung-Ki教授、さらに

これら各要素、技術機能向上のための「デバイス・マテリアル技術」について、荒川泰彦教授、Lee ByoungHo教授がそれぞれ、最新技術についてわかりやすく解説を行った。このエレクトロニクス分野では、わが国と韓国は熾烈な開発競争を繰り広げており、その研究・教育においてトップクラスの両校が、将来の革新的な要素技術、システム技術の創出に向けた幅広い議論を行うことができたのは大いに有益であった。

## ソウル大学校 概要



ソウル国立大学校は1946年に設立された大韓民国で最初の国立大学である。ソウル市内の蓮建・冠岳の2つのキャンパス内に文系・理系、また芸術にわたる幅広い分野の16の学部組織、7つの大学院および専門職大学院組織、2つの付属病院を有する。2007年現在、学部学生数は約14,000人、大学院生は約9,200人、教員は2,500人を擁する国内でもっとも卓越した大学の一つであり、また世界においても高い評価を得ている。

## 高麗大学校 概要



高麗大学校は、1905年普成専門学校として創立され、1946年に総合大学として設置された。ソウル特別市城北區に本部を置く大韓民国の私立大学の中で最も著名な大学の一つである。人文・社会科学から自然科学まで幅広い学問分野において、2007年現在、19の学部組織、18の大学院組織を有しており、学生数は約35,000人（うち大学院生9,000人）、教員数約4,000人を擁しており、世界の大学との交流も盛んに行われている。

# Seoul



### 【教育学系フォーラム】

## UT-KU Forum: "University Education in the midst of Globalization"

教育学系フォーラムは、「グローバル化の中の大学教育」をテーマに、6月26日（火）に高麗大学校百年記念館で開催された。小宮山宏本学総長と韓昇洲高麗大学校総長の挨拶の後、フォーラムの統一テーマのもとに、「グローバル化の中の大学」、「人文社会科学の未来」、「大学教育の展望」の3つのサブセッションを設けて、9つの発表を行い、最後に、総括的なパネルディスカッションを行った。本学からの発表者は、浅島誠本学理事・副学長と金子元久・木

畑洋一・小林雅之・佐藤健二・高橋和久の各教授、韓国側からは、尹在敏・崔官・韓龍震・李南昊の高麗大学校教授の他、高炳憲（聖公会大学）禹濟昌（木浦大学）の2教授である。

大学教育のグローバル化は、留学生・教員の交流・移動、教育内容、教育方法など多様な側面にわたっており、グローバル化の中の大学教育の再構築は、国際的に共通の課題である。特に、教授言語、教育方法、人文社会科学や教養教育のあり方について、多くの共通の課題が提起さ

れた。同じような状況におかれた日本と韓国の大学が、共通の問題を相互に検討し、意見を交換したことは多大な意義を有していると言えよう。また、グローバル化を単に大学教育の危機と捉えるのではなく、積極的なチャンスと考えるべきか否かとのグローバル化に対する大学教育の方向性という根本的な問題をめぐっても議論がなされた。

フォーラムには、約150名が参加し、それぞれの発表やコメントに対してフロアも含めて、活発な意見交換が行われた。最後に、浅島誠本学理事・副学長と高麗大学校の沈光淑副総長が閉会の挨拶を行い、今後の日韓のさらなる大学交流を約して幕を閉じた。

### 【人文学系フォーラム】

## UT-SNU Forum: "Future Directions in the Humanities"

6月25日（月）、ソウル大学校ホアム・コンベンション・ホールを会場にして、「人文学の可能性—その方法と実践」を主題とするUT-SNUフォーラム2007人文学系セッションが開催された。フォーラムは、東京大学教員が研究発表を行い、ソウル大学校教員がコメントをつけ、会場参加者と討論を行うという形式で進められた。

フォーラムは午前9時、武内和彦本学国際連携本部長による趣旨説明を受けて、李泰鎮ソウル大学校人文大学学長（人文学部長）が歓迎の辞を述べて開始された。発表者と発表テーマおよびコメンテーターは以下のようである。

- ①安藤宏（人文社会系）「近代小説の要件—小説の演技性」：権寧珉（人文大）
- ②柴田元幸（人文社会系）「『世界文学』は可能か」：朴性昌（人文大）
- ③羽田正（東洋文化研究所）「『イスラム世界』の見解と新しい世界史」：李恩廷（人文大）
- ④柴宣弘（総合文化）「地域史を求めて—バルカンの事例から」：安秉稷（人文大）
- ⑤渡辺浩（法學政治学）「『文明開化』と『天道』」：琴章泰（人文大）
- ⑥一ノ瀬正樹（人文社会系）「個人と人格との相克—刑事責任に見る近代の自律的人間観の陥穽とその脱却—」：金度均（法科大）

フォーラムは午後4時半、宋虎根ソウル大学校対外協力本部長による全体を概観しての感想の辞と小宮山宏本学総長の閉会の辞によって終了した。夏休み中にもかかわらず、人文大学（人文学部）の教員・大学院生を中心として多くの参加者があり、日韓人文学共通の問題をめぐって熱心な発表・討論が行われた。

[総長対談 in Seoul 1]

# 東アジアに 学術の架け橋を

本学・小宮山宏総長とソウル大学校・李長茂総長の対談は、  
UTフォーラム2日目の6月26日、ソウル大学校にて行なわれました。  
ともに工学出身の両総長の対話には、  
「世界に貢献できる大学を創っていこう」という  
大学人としての思いが鮮明に表れています。

“私は総長就任以来、  
「開放と融和」の精神の重要性を  
繰り返し強調してきました”

“私は「大学は、未来を作る  
シンクタンク付きの広場である」  
と考えています”



李長茂  
ソウル大学校総長

小宮山宏  
東京大学総長

**李** はじめに、昨年、朝鮮王朝実録五大山本が東京大学からソウル大学校へ返却された件に関して、小宮山総長に感謝の意を申し上げると同時に、実録は朝鮮王朝王室の文庫である奎章閣で大切に保管している旨をご報告したいと思います。

**小宮山** 集中した議論の結果、私たちもあれが最も自然な解決方法だとの結論に達しました。いろいろと政治的な動きが出てくることも懸念され、スピードが最も重要な問題でしたが、速やかに受け入れていただいたので私どもとしましても非常に感謝しております。私はあの出来事は東京大学とソウル大学校が人と人との具体的な関係を含めて、非常に良い関係を持っていたことによって得られたひとつの結果だと思っています。

## グローバル化時代における大学の機能と役割

**小宮山** ところで、李総長はグローバル化時代の大学のあり方についてどうお考えですか？ 私の意見を先に申しますと……グローバル化時代とはいえ、私は「大学は主に企業のための人材を育てている」とは考えていません。むしろ、これからは「大学から未来の社会に向けた提案」をしていく姿勢が求められます。グローバル化以外にも社会には多くの問題があります。例えば今回、ソウル大学校で催された第1回ユニバーシティ・プレジデント・フォーラムで私がお話したのはサステナビリティ学という学問についてです。21世紀は人類の持続性が問われていて、環境の問題、エネルギーの問題、高齢化社会の問題など様々な問題に対してどのような社会システムを作っていくのかという答えが求められています。この種の問題は人類がいままで経験してこなかったことであり、これらの重要な課題にこそ様々な分野の知を持つ人たちが協力

し合い、解決のシステムを提案することが求められます。それは大学にしか出来ない、大学が担うべき課題であると考えています。

**李** 大学は本来、真理の探究を目的とする純粋学問の共同体としてスタートしましたが、産業・情報社会の21世紀を迎え、社会や国家に貢献できる能力に関心を向けるようになりました。その結果、大学は産業面での人材、国家が必要とする人材を養成することにさらなる関心を向け、学生らは先端科学技術、応用科学、職業選択などにばかり過度な関心を持つようになりました。しかし最近の世界的な流れはただ実益的な学問を学んで来た学生よりも、しっかりと基本を学び、それを土台に次々と変化していく社会に応用できる人材を求めるように変化しています。特に、国際化が進むにつれて生じた競争の激化、技術・産業中心の社会が持つ弊害のためにも、他者への寛大な心、共に生きるといった観点からもう一度人文科学系ルネッサンスの時代が到来すべきだという主張があります。先ほど小宮山総長がおっしゃられたサステナビリティ、持続可能な社会を我々が維持するためにも自然科学と人文科学が互に行き交い、理解し合う方向に世界は向かわなければならないと思います。



**小宮山** さらに付け加えますと、グローバル化が世界を単調にすることが決してあってはならない。つまり、同じようなルールで、同じような価値観で、みんなが同じように生きていくような状況を生み出すことは避けなければならないと考えています。例えば、「企業は

目指していくような社会はとてつまらないものになってしまう。全員がお金を求めて、英語を話し、同じものを食べて、などということになればコミュニケーションをする意味すらもなくなってしまいます。これでは望ましいグローバル化とは言えない、そういうグローバル化にしてはならないと考えています。そのような状況が生じつつあるときにこそ、自分たちが自分たちの国の人材を育てるということの意味が大きくなっていくのであって、グローバル化ということは「世界で通用する人材を育てる」ということ、「自分の国を愛する」ということ、さらには「地域などのさまざまな領域を愛する人たちを育てる」ことだと思っています。具体的には李総長が今おっしゃられたことになるのではないかと思います。

**李** 小宮山総長のご意見に全面的に共感します。世界化とはそれぞれが行うものでなく、共に進む世界化でなければなりません。まずは「アジアの同質性」を基本とし、学問と文化の交流を通して同質性を確保していく「アジアを出発点とした国際化」から、さらに、もう一步世界へと向かわなければなりません。そのときに国際化のキーワードはダイバーシティ、つまり、「多様性」だと言えます。異文化、異なる知識・人・思想が出会い、新たな想像力と創意力が加味され新しいものを創造していく。そのためにも国際化は非常に重要です。現在、ソウル大学校には約2,000名の外国人留学生が在籍しており、一方ソウル大学校の学生も東京大学をはじめとする多くの大学で交換留学生として学んでいます。このように異文化学習から新たな知識と文化が生まれ、異文化とそこに暮らす人々に出会い、理解することで我々の言う寛容、他人を理解する精神も生まれます。したがって、その意味でも国際化は非常に重要であると考えています。



**小宮山** 同感です。私は、ダイバーシティには3つの重要な要素があると考えています。一つは「自然の多様性」、ナチュラル・ダイバーシティ、もう一つはよく言われていますが「種の多様性」、スピーシーズ・ダイバーシティ、そして、最も重要なのは先生が今おっしゃられた「文化の多様性」、カルチュラル・ダイバーシティだと思います。もちろん、すべての要素が大事ですが。文化の多様性とはとても重要なキーワードだと思います。

## 現在、両大学が取り組んでいること

**小宮山** 私は総長に選ばれたときに一年間かけてアクション・プランを作り、やりたいことを全てリストアップしましたが、130項目ぐらいありました。130項目では多すぎるので、やりたいことを一つだけ教えてくださいといわれても困るのですが、もし、どうしても一つだけというならば「知の構造化」だと思います。人間の知識というのはアリストテレスの時代から延々と増え続けていて、20世紀中には知識の総量が1,000倍から10,000倍にまで増えています。そのために学術の領域が細分化してしまっただけで、今われわれが話しているグローバル化の中で解決しなければならない問題は非常に複雑で大きな問題になってしまっています。エネルギーの問題、貧困の問題、高齢化の問題など、非常に複雑かつ大規模な問題です。この間のギャップを埋めるためには細分化されてきた知識を統合する方法が必要です。そういった意味における「統合」というものを一つでもいいから実現してみたい

と考えています。その一つがサステナビリティ学です。その他にも加齢学（ジェロントロジー）や共生のための哲学などいくつかのプロジェクトを総長室が支援しながら立ち上げていますが、いずれも今申しあげました「細分化された知」を社会のために統合するという試みの一つです。

**李** 小宮山総長のお話に同感です。大学といってもいろいろあり、いわゆる基礎教育の強化、柔軟性の確保、自立性、国際化などの課題がありますが、つきつめると「創造的な環境や雰囲気」、「社会が未来に発展していく上での方向性」が大学教育に反映されることが重要だと思います。そのためには大学が心を開き、革新的な変化を遂げなければなりません。私は総長に就任して以来、革新的な雰囲気や開放のために「開放と融和」の精神の重要性をくりかえし強調してきました。学問同士が互いの壁を越えて相通じ、異質なものが会った時に創造的な結果が生まれるために、まずは「開放と融和」の雰囲気が学内に満ちていることが重要という意味です。そして、学内から社会にも開放し貢献すること、さらに国際的にも開放し、海外の学者がこちらに来て教育したり学生が互いの国を行き来したりする、外国への「開放と融和」が重要であると考えています。「開放と融和」というのは大学だけの課題ではなく、社会のありかたにおいても必要なことだと思います。

**小宮山** 李総長とはお互いに考え方が非常に似ていると感じますね。やはり両校とも総合的なリーディング・ユニバーシティであるという特徴からもたらされる共通点なのだと思います。私は最近、「一言で言うならば、大学は『未来を作るシンクタンク付きの広場』である」と考えていますが、そういう意味で、これは先生がおっしゃられたコンセプトと同じかもしれません。

## 学科の壁に対する方策

**李** 大学の外部には「大学にはまだまだ『学科の壁』が存在する」と考えている方々も多く存在します。その問題を解決するために、私たちは「自由専攻制」を導入する計画です。これまでの「複数専攻」の他に、来年からは、例えば技術経営や情報文化、情報と文化と芸術などを連合させた「連合専攻制」を施行することが決まっています。他にも別々の学科の教授が4人以上参加し連携した分野、例えば哲学と経済と心理などをまとめて一つの専攻とさせる「連携専攻」、自分の専攻以外の分野で指導教授の指導を受けながら自らが追究する新たな形の専攻を作っていく「学生設計専攻」も来年から施行する計画です。その他にも兼任教授の活性化は勿論、多様な学科の融合教科目も開発しています。20人ほどの学生が一つのクラスになって、小宮山総長が話された持続可能性、宗教と戦争など関連性のあるトピックを定めて一学期の間討論を行ない、1~2単位を修得する教育方針なども考えています。このように一般的な科目の中でも新しい知識を活用し、様々な分野の学生と教授が共に教養を学ぶ教育システムへと変えていくことが重要だと考えています。

**小宮山** 先ほども申しあげましたが、李総長とお話をしていて、非常に共通点が多く意見が合うと感じています。それは私も李総長も工学部の出身であるからだと思います。でも少し違うのは、李総長が機械工学出身で私が化学工学出身である点です。機械的な発想と化学的な発想には少し違いがあって、李総長のほうがよりシステムティックにお考えであり、今のお話などには非常に感銘を受けます。私たちの問題意識はやはり共通していて、「幅が広くても、奥行きのない人材を創っては意味がない」ということです。いかにして「深くて幅の広い思考を持った人材を創るか」が最大の課題であり、これ

について一所懸命に考えています。東京大学がやっていることはもう少し化学的だと思います。例えば、東京大学は1年生、2年生でリベラルアーツを履修するのですが、そこでは、専門の先生方が直接助けることにより、「リベラルアーツと最先端のサイエンスとをいかに接近させるか」というような試みをしています。それから、「学術俯瞰講義」というものを始めています。これは、学術全体を生命、物質、情報、社会、環境、哲学の6テーマに分け、名誉教授なども含めた講師陣により講義するというものです。前総長の佐々木先生や現総長の私などもそこに入って教えています。また、ソウル大学校ほどには実現しておりませんが、二人の教員が一人の生徒の指導教員になるという試みも行っていて、これは結構うまくいっています。二人の先生から学ぶことで生徒が学際的になれるということのほか、先生が成長するということが起きます。そのほか、サステナビリティの修士課程では主専攻と副専攻のコースを作ることを始めています。いずれにしても機械工学の李総長が指導なさっているソウル大学校のほうが、今は全体をシステマティックに実現していると感心しました。とにかくこれは非常に難しい問題なので簡単な答えは無いと思います。おそらく、いろいろな大学がいろいろなチャレンジをするのだと思います。

## 人材選抜と共同研究の可能性

**小宮山** こうして、ソウル大学校と東京大学が親交を深めていく先には、やはり、新たな共同研究の可能性が広がっているように思います。特に大学間に限定せず「国際的な親交を」と考えるならば、例えば、サッカーを一緒にやるだけでも仲良くなれるわけです。しかし、我々研究者の場合は、学術の分野で一緒に研究を行ない、そこで仲良くなっていくプログラムを進めるべきなのだと思います。最も現実的なのは……まず、先生同士が

共同研究を行い、さらに「東京大学の学生が1年間、東京大学で研究をし、次の年にはソウル大学校でカウンターパートの先生の下で研究をし、最後の1年を再び東京大学で研究をして博士号を取る」などの方法が考えられます。このようなプランがスピードもあり現実的な方法ではないかと考えていて、実はいろいろな大学と始めようと計画しています。ソウル大学校とも、ぜひ、このプログラムをスタートしたいと思っています。



**李** 大学は優秀な人材を育て、国家的知的財産を創出する責任があります。加えて新たな知識を創造する場でもあるので、ハードルを下げるということも重要かと思います。「成績が多少足りなくても社会・経済・地域的に不利な立場にある学生をどのように受け入れていくか」などは、社会に課せられた大学の責務だと考えています。政府は社会全体の安定性・公平性を考慮するため、高等教育の考え方において、大学と衝突することもあります。もちろん大学も偏った人材ばかりを選ぶのは誤りです。ソウル大学校では、地域均衡選考、農漁村特別選考、特技選考、特殊教育対象者選考などを通じ、多様な人材を様々な方法で育成しています。このように幅広い人材が入学できるよう、大学が社会に対し譲歩・妥協する姿勢も必要です。さらには、ソウル大学校と東京大学はそれぞれが東アジアを代表する大学の一つとして様々な交流の機会を持つことが共通した特徴であると言えます。小宮山総長がおっしゃられた教授の共同研究、学生の相互訪問などは大賛成です。のみならず、韓国、日本、中国は歴史的な文化のルーツもあり、儒教を含むアジアの文化・価値などを共に

議論することが必要だと思います。すでに東京大学、ソウル大学校、北京大学は毎年各大学で人文科学の学術大会を共同開催することにしました。その他にもビデオ・カンファレンスを導入し、1学期の間3大学の教授と学生が共同でアジア文化の講義を行う予定があります。東京大学、清華大学、ソウル大学校の工学部の学生を多数交流させる計画も発表されましたが、今後はこうした多様な計画を通じ互いに学ぶだけでなく、東アジアの価値を共有する方向へ進むべきだと考えています。最後になりましたが、大学改革を世界的にリードしている総長のお一人である小宮山総長がこうしてソウル大学校を訪問してくださったことに、心から感謝の意を申し上げますとともに、今後も両大学の友情が続くことを期待しています。

**小宮山** ありがとうございます。李総長とは以前にも同じ時期に工学部長としてお互いに同じ立場で過ごしましたが、今回また同じ時期に総長という立場で改めてお会いできて大変光栄です。これを機に、共に東アジアを代表する大学として一層の交流、協力の実現にむけて歩みを進めたいと考えております。

平成19年6月26日ソウル大学校にて  
(この記事は、通訳を介して、日本語と韓国語で行なわれた対談を日本語文に訳したものです)

### 李長茂 LEE Jang-Moo

1945年生まれ。67年ソウル大学校工科大学卒。75年アイオワ州立大学工学研究科博士課程修了。工学博士。76年ソウル大学校工科大学教授。97～2002年工科大学長。06年7月より第24代ソウル大学校総長。

### 小宮山宏 KOMIYAMA Hiroshi

1944年生まれ。67年東京大学工学部卒。72年東京大学大学院工学系研究科博士課程修了。工学博士。81年工学部助教授。88年工学部教授。99～2000年評議員。00～02年大学院工学系研究科長。03年副学長。04年理事（副学長）。05年4月より第28代東京大学総長。

## [総長対談 in Seoul 2]

# 日韓の 大学教育を語る

もうひとつの総長対談、本学・小宮山宏総長と  
高麗大学校・韓昇洲総長の対談は6月25日に行なわれました。  
お二人の対話は、大学基金、英語教育、入試制度と多岐にわたり、  
教育者としての熱意あふれるひとときが育まれていました。

“そうですね。  
学生の英語力向上から  
得られるアドバンテージは  
大きいと思います”

“大学の国際化を  
考えた場合、  
きわめて重要な課題は  
英語教育ですね”

韓昇洲  
高麗大学校総長



小宮山宏  
東京大学総長

 **小宮山** このUTフォーラムは2000年に始まり、これまで1～2年に1回の割合で開催しています。第1回の開催地はマサチューセッツ工科大学でした。2回目はスタンフォード大学、第3回目がシンガポール国立大学、第4回目がスウェーデンの4大学、5回目である前回は北京で、北京大学・清華大学・中国科学院の協力を仰ぎ、行われました。このソウルで行なわれる第6回UTフォーラムの開催に向けて賜りましたご協力を深く感謝いたします。

 **韓** こちらこそ、このような非常に興味深い企画に参加させていただきましてありがとうございます。もう7年になるということですが、いままで、このUTフォーラムには学生と教員の双方が参加していたのでしょうか？

 **小宮山** このフォーラムは東京大学の国際化の促進を目的としていることから、その時々状況によっては学生も参加します。高麗大学校も同様かと思いますが、東京大学の教員・学生は多数の論文を専門誌や学術誌に掲載しています。つまり、学術的な面での国際化は進んでいると言えますが、その一方で、私たちは「東京大学の本質的な国際化」を促進する必要があります。そのためには人と人との具体的な交流や、その交流の実現に必要なネットワークを作ることが不可欠であるということから、「私たち自身が国際的な場にもっと身を置く必要がある」と考え、日本国外での定期的なシンポジウムの開催を企画したわけです。このようなことから、フォーラムには東京大学の教職員が必ず参加しています。また、ご質問のとおり学生の参加、あるいは主催によってシンポジウムを行う場合もあります。これまでの例では、シンガポールで4年前に開催したUTフォーラムがその後、シンガポール国立大学（NUS）との関係を深める大変有効なきっかけになったと考えています。私はシンガポー

ル政府の教育アドバイザーでもありますが、このような関係を作ることができたのもUTフォーラムの成果の1つと考えています。ところで、この2年ほどの間に我々の大学は貴校と交換留学生協定を結びましたが、その際、私は高麗大学校が大変美しいキャンパスをお持ちであることを知って、感銘を受けました。

**韓** 学内にいくつもの新しい建築物が建ちました。今では多くの大学が高麗大学校の施設を模倣したがつっていると聞きます。私も「デジタル・ライブラリーを備えた図書館など、学生のために作られているさまざまな施設は素晴らしいものだ」と思っていて、私自身、よく利用しています。私たちの大学では、理科系の学部がひとつのキャンパスに、そして、文科系の学部がもうひとつのキャンパスにあります。この2つのキャンパスは隣り合わせになっています。実は、この2キャンパスのバランスを取るのが難しいのですが。

## 大学基金の重要性

**小宮山** 現在、私たちもインフラの整備を進めています。たとえば、多数の外国人教授陣を抱えるためにゲストハウスを2棟建設する予定です。高麗大学校のシステムやインフラは非常に充実していると思います。

**韓** 私たちも海外留学生と教員のための建物を用意しました。東京大学の運営はすべて国の予算によって成り立っているのですか？

**小宮山** 3年前まではそうでした。現在は国立大学法人です。

**韓** つまり、自分たちで資金を調達しなければならないということですか？

**小宮山** 政府から補助金を得ていま

すので、財政的な面での変化はそれほど急激ではありません。しかし、私が総長に就任したときには大学の基金が何もなく、基金を作ることが私の現在の大きな課題です。基金による収入というものは通常、利子や配当だと思いますが、高麗大学校の寄付と基金の収入の割合はどのような姿になっていますか？

**韓** 我々の基金は、キャッシュはあまり多くなく、不動産の形で持っています。しかし、我々には非常に熱心な同窓会組織があり、この組織に本当に助けられています。100周年記念のときには特に大きく貢献してくれまして、大きな寄付額を得ることができました。財閥タイプの大企業が寄付するのです。全体の比率は授業料の割合が50%。20%が寄付金、残り20%が研究基金から、後はその他の収入で運営しています。

**小宮山** 我々の場合は、寄付金の定義を同じ基準で考えた場合10%以下になると思います。この数字を増やす必要があります。それは私立化のためではなく、法人化のために必要になります。現在、それを進めています。

## 英語教育への取り組み

**小宮山** 言うまでもありませんが、



大学の国際化を考えた場合の極めて重要な課題が英語教育です。昨年私が貴校を訪れたときには、私たちとは異なる英語教育への取り組み方をしておられて非常に印象に残りました。当時の魚允大総長は私に「英語による授業の比率を30~50%程度にまで引き上げる計画だ」と話し

ておられましたが、現在ではどのような状況になっていますか？

**韓** 現状では30%以上の講義を英語で行っていて、学生に対しては英語で行われる講義を5クラス以上取ることを必須としています。また、教授の新規採用に関しても、英語での講義能力を前提に選定しています。魚允大元総長は、強引なぐらいに精力的な人物なので（笑）、このように、ある意味、困難な方針を押し進められたのだと思います。我々もこの方針を堅持し、数年内には英語による講義を50%以上にすることを目標にしています。一方では、例えば韓国文学や韓国文化に関わるものなど、あるいは日本文学の授業もそうですが、英語で講義を行うことに意味がない学科もあるというジレンマも生じています。そもそも、韓国文学を英語で教えられるような人材はなかなかいないものです。しかし、新しい教員の面接を私が行うときには、最初は韓国語で話し、しばらくして英語に切り替えるのですが、同僚になるかもしれない若い人々の中にはとても上手に英語を扱う方がいて、感心しています。もちろん、英語が唯一の国際的な外国語というわけではありませんが、現状では多くの言語を扱うことはできません。ご承知のように高麗大学校は韓国の他の多くの大学と違い、「韓国人により韓国資本で設立された大学」です。西洋化で先頭を走れた「米国の宣教師によって設立された大学」などのような、設立当初からの欧米とのコネクションは無かったのです。しかしながら、現在の私たちの大学の国際化の度合いは大変素晴らしいものがあると考えています。たとえば、今年の夏期講習には世界中から学生を募集しています。実際に韓国に来て講義を受けてもらうのですが、各国からの参加者が1,500人ほどいます。もちろん韓国内からも応募があります。また、教授陣も海外から多数招待しています。その多くは米国からですが、他の国からも招待します。こう



して、海外の教授と学生が韓国でお互いに教え、学ぶ機会を高麗大学校が提供することは、同時に、韓国の教授、学生、また、一般の人々にも交流の機会を与えることとなります。

**小宮山** 素晴らしい施策ですね。しかしながら、何ごとにもメリットとデメリットがあると私は考えています。20年ほど前に研究室のセミナーを英語で行った経験がありますが、議論自体が我々の英語力によって制限されてしまうと考えると、半年で日本語に戻しました。広範囲でこのような状況が起こるのではないかと考えられます。つまり、教授陣と学生の双方の英語力の制限による弊害です。このような点を考えると、私には50%は高すぎるように感じます。韓国の学生のTOEFLの平均点が日本の学生よりも10%高いことは承知していますが、それでもやはりハンディキャップは少なくありません。この点に関してはどう思われますか？

**韓** たしかにそうですね。学生たちの英語力を高めることから得られるアドバンテージは非常に大きいと思います。しかし、当然ながらロスも同時に起こります。学生たちが英語による講義を100%理解できるのであれば問題ありませんが、英語力の不足によって70%、80%しか理解できないのではないかとこの点は大きな懸念材料です。そこで、新しく採用した教授にはオリエンテーションを実施し、実際の講義の前にはリハーサルを行って、学生の前で講義を行うようにしています。特に、教授が韓国人で、クラスも全員韓国人であるような場合には英語での講義が難しくなります。何人か外国

人がいればまだいいのですが。おっしゃられるとおり、全体の35%から40%での実施が理想的なのかもしれません。実際には50%を達成するのは困難だと考えていますので、それほど心配はしなくても良くなりそうですが（笑）。通常の講義を英語で行うという方法以外に、新たにインターナショナル・カレッジを設立し、そこで英語と韓国語の両方であらゆる科目を学生たちに学ばせる、というアプローチを採っている大学もあります。たとえば……小宮山総長は化学工学がご専門ですが、つまりは日本語と英語の両方によって同じ化学工学の授業を行うという方法です。これも良い方法だと思いますが、講義や教員をすべて2倍にしなければならず、コストがかかりますね。少し無駄のようにも思いますが、学生にとっては良いかもしれません。

**小宮山** 今おっしゃられたことについて少しお話させていただきますと、私が専門にしている化学工学は20世紀初頭にマサチューセッツ工科大学で新しく開発された研究分野であるために、伝統的には英語で教えるのに非常に適していて、日本語にもほぼ完全に翻訳できました。しかし、化学工学はその後、日本やその他の国で広く、深く発展したために基本的なコンセプト自体から英語では表現しにくくなってしまった部分が生じたのです。たとえば英語と日本語の双方を完全に理解している人物でも、米国に無いコンセプトは英語に翻訳できません。言語的な相違が根本的な文化的相違に起因するという点が難しいのです。例えば、日本語には「もったいない」という表現があります。これは、「消費が必ずしもいいことではない」という考え方です。しかし市場経済のメカニズムの中では消費は悪いことではありません。それでも「もったいない」は日本文化にとって重要な表現なのです。グローバル化は不可避だと思いますし、良い影響もあると思います。しかし、このような文化的相

違の側面を考えないと、私たちの価値観そのものが均一化し、一元化するという問題を引き起こすと考えています。このようなことから、東京大学では最近、サステナビリティ学のコースを立ち上げました。修士課程で授業はすべて英語で行います。

## 両国の入学試験の違い

**韓** 入試制度は非常に重要なテーマですが、東京大学ではどのような入試制度を採っているのでしょうか？

**小宮山** 筆記試験を2回行いますが、そのうちの1回は全国で50万人の生徒が受ける「大学入試センター試験」です。その後、各大学で個別の試験の実施も可能なので、東京大学では2次試験を行い、この2次試験の結果とセンター試験の結果を合わせて合否を判定します。センター試験が「1」、2次試験が「4」という比率で点数を換算する方法をとっているため、相対的にセンター試験の比重は低くなります。

**韓** 高校の成績は考慮されますか？

**小宮山** 原則的には全く考慮されません。

**韓** 我が国では現在、この問題が非常に重要な問題として大きく扱われています。実は、明日、盧武鉉大統領が韓国国内の全大学の総長を集めて、この件に関する懇談会を開催します。入学試験と平準化の問題が議論されると思われます。今、わが国には、優秀な生徒を獲得することがもっとも重要か、あるいは、すべての生徒を受け入れて優秀な生徒として育てていくことがもっとも重要か、との論争があります。優秀な大学の出身者は、「優秀な生徒を獲得することが重要だ」との考えに疑問を持ちませんが、私は今、「どうして優秀な生徒が必要なのか」を

説明しなければなりません。今までは「あまりに自明なことだ」と考えていたのですが、ひょっとしたら、そうではないのかもしれません。

**小宮山** しかし、もしも優秀な大学が優秀な生徒を採らなくなったらどうなるのでしょうか。「その生徒たちは外国の大学に出て行く」と思います。国際化が進んでいますから。我が国の政治家たちによる、また別の議論として、「東京大学の卒業生は東京大学の大学院に進めないようにしてはどうか」というものがあります。そうすれば大学が平等化されと考えているようです。われわれはこの政策に強く反対しました。完全には予想できませんが、結果は単純に、優秀な学生は海外に行くか、就職するか、他の大学に入って東京大学の院生になるかのいずれかになると思います。このような歪んだ結果が生まれ、最終的に日本の大学全体のレベルが落ちるように思います。このことで思い出すのは私の高校時代です。私が高校生の時に旧来の高校のシステムが崩壊したのです。私が卒業した公立高校からは毎年100人近くが東京大学に入学していました。最も優秀な、別の公立高校からは400人の卒業生中200人もが東京大学に入学していました。それに対してある政治家が不健全であるとして公立高校の平均化を進め、新しい制度を作りました。その結果、最も優秀な高校に行きたいと思う生徒も必ずしも希望通りに進学できなくなり、それぞれの高校に平均的に生徒が入学するようになりました。3年から5年ほどの間に優秀な公立高校のレベルはすべて下がり、最も優秀な公立高校からも東京大学へは1人か2人しか入学しなくなりました。このようにして公立高校のレベルの平均化と受験競争の緩和を狙ったのですが、実際には、私立高校に競争の舞台が移されていっただけなのです。学校数の少ない私立高校での競争はより激しさを増していきました。この経験から「新しい教育制度に対

する社会の反応は得てして予想のできないものになる」ということが判ります。結果を予想することは非常に困難です。

**韓** 今、お話いただいた話とよく似た事例が韓国にもあり、「私教育」と呼ばれています。これは、塾や家庭教師などで行なわれる教育に関する深刻な問題です。進学率の高い優秀な公立高校がいくつかあったのですが、入学試験ではなく、学区を指定して抽選で生徒を無作為に入学させるように制度が変わったのです。その結果、いくつかの私立高校が大きく難易度を上げました。親が教育に投資して、塾や家庭教師などによる「私教育」によって私立高校に入学させるようになり、私立高校はさらに進学率を高めました。その結果、「高校の極集中化」が起きたのです。中くらいのランクに位置する高校の生徒は優秀である可能性がありますので、政府はこうした私立の高校に入りにくくすることで私教育のコストを削減できると考えはじめています。しかし問題は「その制度が施行された途端に親が大金を投じて今度は学校での成績を上げることに血眼になる」ということです。今まで以上に様々な塾や私的な授業が行なわれるようになると私は考えています。先ほどおっしゃったように、必ず予見しなかった抜け道ができ、結果を予測することは困難となります。ですから、教育制度に関してはあせらないで進めることが重要だと思います。

**小宮山** その点に関して、日本政府が設立した「教育再生会議」では、大学の活動を改善する目的で、大学改革に関する議論を行っています。私もその一員になっています。ここでは他の委員から、さまざまな意見や提案が出されています。その1つがさきほど申し上げました学部と大学院の切り離しです。ここで私が主張しているのは「大学制度の評価は5年、10年単位で行うべきことである」ということです。たとえば、日本の国立大学は

すべて2004年から国立大学法人になりました。つまり3年前です。そしてその結果を6年間で評価すると約束しました。つまり今から3年後です。決して変化を強要するべきではなく、この6年間は何も変えるべきではないのです。変化を与えすぎると、優秀な大学への有益な改革を特に阻害してしまいます。教育制度の改革を評価するには十分な時間を与える必要があると考えています。

最後は大変シリアスなお話になりましたが……本日は有意義な対話をさせていただき、ありがとうございました。明日の大統領との懇談会の成功を期待しています(笑)。

**韓** こちらこそ、ありがとうございます。お互いに幸運を祈りましょう(笑)。

平成19年6月25日ソウルプラザホテルにて  
(この記事は英語で行なわれた対談を日本語文に翻訳したものです)



### 韓昇州 HAN Sung-Joo

1940年生まれ。62年ソウル大学校社会科学部外交学専攻卒業。70年カリフォルニア州立大学バークレー校政治学専攻博士課程修了。政治学博士。78年高麗大学校教授。93～94年韓国外務大臣。03～05年駐米韓国大使。07年3月より高麗大学校総長。

### 小宮山宏 KOMIYAMA Hiroshi

1944年生まれ。67年東京大学工学部卒業。72年東京大学大学院工学系研究科博士課程修了。工学博士。81年工学部助教授。88年工学部教授。99～2000年評議員。00～02年大学院工学系研究科長。03年副学長。04年理事(副学長)。05年4月より第28代東京大学総長。



### 小林雅之

大学総合教育研究センター  
教授



### 金愛花

大学院教育学研究科  
博士課程2年

韓国の大学のシステムは日本とほぼ同一であるが、大学自体を「大学校（テハッキョ）」と呼び、学部や短期大学のことを「大学（テハク）」と呼ぶ（例えば、ソウル大学校人文大学）。大学校、短期大学以外にも、教育大学、産業大学、技術大学、放送通信大学、及び各種学校、遠隔大学の大学課程や各種学校、遠隔大学の専門大学課程など、様々な高等教育機関が存在する。

周知のとおり、韓国は異常と言うほど学歴を重視する社会風土があり、出身大学によって就職や出世が影響されることもあるため、大学校及び短期大学への進学が主流となっ

ている。その中でも、一般的にソウルを中心とする首都圏の大学が上位とされ、地方大学は軽視される傾向にある。国立大学として有名なのは、ソウル大学校（ソウルテハッキョ）、木浦大学校（モクポテハッキョ）などがあり、私立大学として有名なのは、延世大学校（ヨンセテハッキョ）、高麗大学校（コリョテハッキョ）、梨花女子大学校（イファヨジャテハッキョ）、成均館大学校（ソンギョングァンテハッキョ）などがある。

### 巨大な私立セクターと大学進学率

また、日本と同様に、大学が国公立セクターと私立セクターに分けられているが、大学数からしても、学生数からしても私立の割合が非常に大きい【図1、図2】。OECD各国の中でも、これだけ私立セクターが大きいのは、日本と韓国だけであり、両国の共通の特徴となっている。

1970年以降の高等教育への進学率を見てみると【図3】、1990年頃まで30%強だったが、1990年代半ばから急速に拡大し、現在で

は80%を超えており、世界各国のなかでも最も高くなっている。

### 激しい受験競争と入試改革

マーチン・トロウが提言しているユニヴァーサル・アクセス段階（進学率が50%を越え、誰でも高等教育を受けられる段階）に達しているのにもかかわらず、韓国においてはまだまだ受験競争が激しい。そのため、社会の大学入試への関心も高く、大学入試制度の改革が絶えず提起されてきた。1945年建国以来、大きな改革だけでも13回に及んでおり、細部にわたる部分的な手直しも加えると、その数は数十回にも及んでいる。2002年から続いている現行入試制度は「多様な選考資料による選抜」となっている。選抜方法としては、主に日本の大学入試センター試験に該当する「大学修学能力試験」（韓国では、修能（スヌン）と呼ばれている）の成績と高校の学校生活記録簿に基づいて志望校を選定する「定時募集」と、推薦入試やAO入試などに当たる「随時募集（スシモジブ）」とがある。ただし、「随時募集」の割合は少ないし、「定時募集」の入学査定において、大学修学能力試験が入学可否の決め手となることもあって、大学修学能力試験の試験日は国を挙げての行事のような風景になる。親はもちろん、後輩も試験場にきて応援している【写真】。入試日に受験生を安全に受験会場へ送り届けるためパトロールカーが動員され、またリスニング試験時の騒音対策として、航空機の離着陸が制限される場合もある。さらに、近年受験のストレスが原因で自殺を図る受験生も少なくない。

### 重い教育費負担

親は我が子がこのような激しい受験競争を勝ち抜くことができるようにするため、小さいときから高額な進学塾に通わせる。それだ

## 2007年韓国大学事情

# テハッキョ 大学校を めぐる現実

UT  
Forum  
in  
Seoul

国が違えば、大学のシステムも変わってくる。  
ここでは、「UTフォーラムin Seoul」にちなんで、  
隣国・韓国の大学事情を紹介したい。

■ 大学校(私立) ■ 専門大学(私立)  
■ 大学校(国公立) ■ 専門大学(国公立)

図1 韓国の大学数推移

出典：教育人的資源部・韓国教育開発院 教育統計年報各年度版より

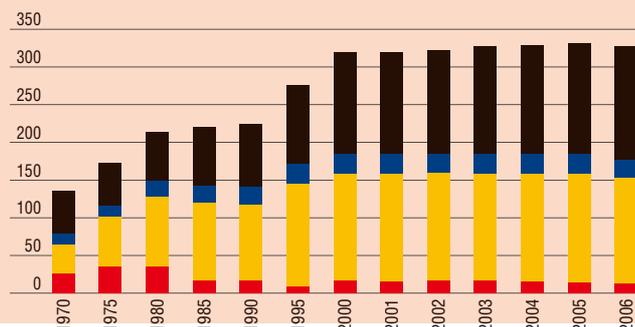
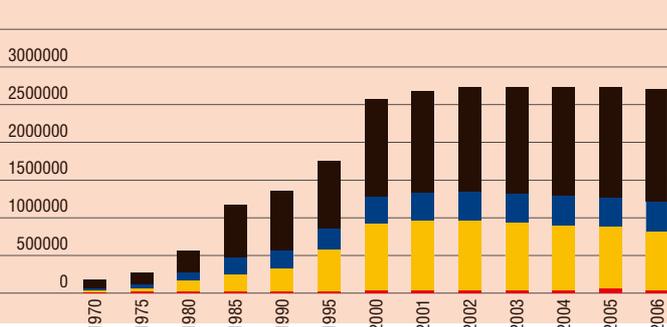


図2 韓国の大学学生数推移

出典：教育人的資源部・韓国教育開発院 教育統計年報各年度版より





試験場に入る先輩たちを応援している後輩たち



試験場の前で我が子の合格を拝む親

けでなく、大学に合格しても重い経済的負担をしなければならない。大学に入学すると、毎年高額の登録金を払わなければならないからである。登録金というのは、「入学金（入学時一回だけ）＋授業料＋既成会費」のことである。登録金は、大学によって若干違いはあるが、基本的に前述の3項目が入っている。近年、国立大学にしても、私立大学にしても、登録金を毎年値上げしているが、とりわけ国立大学の登録金の値上げが著しい。登録金は年々値上げするのもにもかかわらず、奨学金はそれほど多くなく、そのため、登録金は親の負担になってしまう。

韓国の場合、日本と同様に子供の授業料の負担はほとんど親がする。成均館大学校の調査（新入生720、在学学生720、計1440人に対する調査）によると、親負担の学生が77.3%、学資金ローンが13.8%、アルバイトが2.3%、知人からの借金が0.8%である。2006年の年間家計所得が平均2780万ウォン（統計庁ホームページより）（1ウォンは約0.15円）であることを考えると、家計にとって子供の大学の登録金は非常に大きな負担になる（図4）。OECDの統計でも、教育費の親負担の割合は58%と日本の57%とほぼ等しく、他の国に比べてずば抜けて高くなっている（OECD Education at Glance 2004）。

## 大きい学歴別賃金差

このように親が重い教育費負担をしてまで、子供へ投資するのは冒頭でも述べたように、学歴によって就職や出世が大きく影響されるからである。大卒の初任年収は平均2400～2500万ウォン（企業規模別、職種別に違いが大きい）、短期大卒の初任年収は平均1900～2000万ウォンである（韓国大学新聞ホームページより）。高卒の場合、短大卒より200～300万ウォン低い。このように、学歴別賃金差が大きいことが、進学熱を支えている大きな要因となっている。

## 就職のための勉強

ここ10年以内の就職率は近年上昇傾向にあるものの7割以下となっており、大学を卒業しても、必ずしも就職できるわけではない。卒業後就職できるために、またより良い企業や職種に就くために、韓国の大学生が夏休みや冬休みにも休まず、大学図書館で就職のための語学勉強や資格勉強に集中しているところは、日本では見られない風景である。こうした語学勉強や資格勉強への投資も親のもう一つの大きな負担になっている。韓国の大学や学生生活は日本と共通している点も少なくないが、日本以上に厳しいものとなっている。



試験場の前で先輩の合格を拝む高校生

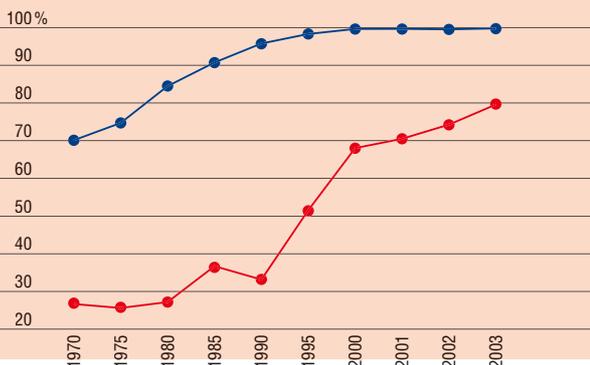


図3 高校及び高等教育の進学率

注：進学率＝（進学者数／卒業者数）×100（中学校から高校への進学率は1990年代初め頃から95%以上になっており、近年100%近い数字を維持していることを考えると、日本でいう進学率の意味とほぼ同じと考えられる）

出典：教育人的資源部・韓国教育開発院 教育統計年報 各年度版より

● 高校から高等教育  
● 中学校から高校

図4 主要大学の在学学生登録金総額比較





辻宏道  
地震研究所  
アウトリーチ推進室  
准教授

## キャンパス散歩

# 日本の地震・火山噴火を追って —地震研究所の15の観測所—

**東**京大学の施設分布図には大小合わせて51のキャンパスや施設が載っているが、その3割にあたる15は地震研究所の附属施設である。いずれも特定の目的を持って設置された小規模な観測所で、学生や教員が闊歩するキャンパスというわけではないが、風光明媚な観光地にあるものも多い。この機会に15ヶ所を一気に散歩してみよう。

観測所は、研究対象によって4群に分けられる【図1】。第一群は和歌山、広島、信越（長野県）、筑波、堂平（埼玉県）の5つの「地震」観測所で、人体にはとても感じない微小な地震を各地域で観測している。第二群は富士川（山梨県）、室戸、鋸山（千葉県）、油壺（神奈川県）、弥彦（新潟県）にある5ヶ所の「地殻変動」観測所で、振動の少ない横坑で地殻のわずかな変形を監視している。第三群は浅間山、小諸、伊豆大島、霧島に置かれた4つの「火山」観測所。火山研究の最前線基地としての役割を担う。最後の第四群は、人工的な電磁気を避け、八ヶ岳の人里離れた山麓で地磁気関係の観測を行う「地球電磁気」観測所である。

このように多くの観測所があるのは、幸か不幸か、我々の住む日本列島が世界有数の変動帯にあることに原因がある。我が国では、世界の地震の1～2割が発生し、活動的な火山の数が100を超える（不幸の方が多いが、美しい自然を見ながら温泉につかるといった幸もある）。すなわち我が国は「自然」が用意してくれた「実験室」ともいえる。現場で何が起きているか、よく見ることから科学は始まるので、観測所は地震学・火山学にとって不可欠の存在なのである。

群馬と長野の県境に位置する浅間山は、爆発的な噴火をする日本でも代表的な火山である。その火口から東に4km、峰の茶屋そばに浅間火山観測所がある【写真2～5】。1933年に設置されて以来、浅間山研究の最前線として多くの研究者の根城となり、火山性地震による噴火予知などに成果をあげた。1955年には山麓に小諸火山化学研究施設が設立されている。2004年の噴火では最新鋭の観測機器が

持ち込まれ、重力の微弱な変化から上昇するマグマの移動をとらえることに成功した【写真6】。現在活動は落ち着いているが、浅間山の今は観測所に設置されたライブカメラで見ることができる\*。

宮崎県南西部に広がる加久藤カルデラ（約30万年前の大噴火の後）で1961年に群発地震が起きたのを機に、1963年霧島火山観測所がえびの高原に設置された【写真7】。その後1991年には新燃岳で小噴火が起きている。

伊豆大島三原山では、1986年に山頂火口から溶岩が流出し、カルデラ内外で割れ目噴火が発生した。伊豆大島火山観測所は、その2年前に設置されている【写真8～10】。この噴火では全島1万人の住民が避難したが、その模様はNHKのプロジェクトXでも紹介された。このとき警察等の保安要員とともに地震研の研究者も残留して貴重なデータを取り続けたことは、科学者魂を示すものとして語り継がれている。昨年夏に公開された映画「日本沈没」には、「東都大学」の富士観測所が登場した。富士山に地震研の観測所はないが、常設の観測網が整備され連続観測が行われている。

太平洋の海底は髪の毛が伸びる程度の速さで日本に向かって運動しており、海溝付近で陸側の岩盤とぶつかり、その下に潜り込む。この過程で蓄積されたエネルギーが一気に解放されるのが海溝型の巨大地震だが、海洋底の運動は休むことを知らず、100～150年もたつと再びエネルギーが溜まって巨大地震を繰り返す。1923年の関東地震や、心配されている東海・東南海・南海地震もこのタイプである。地震研は関東大震災の2年後、地震研究と災害予防・軽減のため設立されたが、このことを「研究所の門に出入りする者は日夜肝に銘じて忘るべからず」と所員でもあった寺田寅彦博士（1878-1935）は残している。

東大地震学教室の教授であった今村明恒博士（1870-1948）は来るべき南海地震に備え、万葉集でも詠われた名勝・和歌浦に、私費を投じて南海地動研究所を設置した。和歌山地震観測所の前身である【写真11】。和歌山周辺は群発地震で知られており、付近に設置され

た稠密な観測網はその後全国に設置される高感度地震観測網の先駆けとなった。信越地震観測所【写真12】や広島地震観測所も地域の観測拠点として活躍している。

四国・室戸岬の最南端には、1995年度に完成した全長150mの横坑を持つ室戸地殻変動観測所があり、21世紀に再び発生するであろう南海地震に関連する変動に目を光らせている。房総半島の鋸山地殻変動観測所は関東地震への備えである【写真13】。

観測所ではないものの、地表の喧噪を避けて岐阜県神岡鉱山の地下1,000mには、地震研が開発した世界最高水準のレーザー伸縮計が設置されている【写真14】。2点間の距離の変化を10兆分の1の精度で計測できる性能を持ち、日本列島のみならず地球深部で起きる変化をとらえることができる。この200m先にはニュートリノの検出で有名なスーパーカミオカンデがあるが、よく見るとここは宇宙線研究所の一角であった。このあたりで観測所を巡る散歩を終わりにしたい。

1	2
3	4 5
6	7 8
9	10 11
12	13 14

- 各観測所の位置図
- 浅間山の中規模噴火(1973年)。火山雷が見える
- 浅間火山観測所から望む浅間山
- 地下36mにある観測室。地震計、傾斜計等が浅間山の鼓動をとらえる
- 天明噴火(1783年)で噴出された火山灰、軽石を含む地層(観測所構内)。浅間山見学の際の必須ポイントの一つ
- 2004年浅間山噴火で上昇するマグマをとらえた絶対重力計
- 霧島火山を見つめる地震・地磁気の観測点(霧島火山観測所附属)
- 1986年伊豆大島の割れ目噴火
- 上空から見た伊豆大島山頂部
- 伊豆大島に設置された地殻変動観測装置(GPS受信機)
- 現在の和歌山地震観測所
- 信越地震観測所。善光寺の近くにある
- 鋸山地殻変動観測所の石英管伸縮計・水管傾斜計
- 神岡鉱山に設置された世界最高水準のレーザー伸縮計



## Campus News

## 01

プレジデント・カウンシル  
in ロンドンを開催

5月18日(金)、ロンドンにおいてプレジデント・カウンシルの第二回会合が開催されました。

このカウンシルは、東京大学の国際的プレゼンスの向上を目的に、総長が世界の要人と意見交換し助言や支援を求める場として、昨年11月に発足したものです。メンバーは14カ国25名の有力企業人、学識経験者、国際機関関係者などに委嘱され、会合は年に2回、うち1回は東京で、もう1回は海外で行われることになっています。今回は海外で開催された初めての会合であり、ナラヤラ・マルチンフォシス名誉会長(インド)、ポール・ラウディシナATカーニー会長(米国)らに加え、初参加のメンバーとして、リタ・コーウェル全米科学財団前長官(米国)、イアン・デビスマッキンゼー・アンド・カンパニー



左/会議が開催されたランドマークホテル  
右/メンバーのジャミール氏(左)と横山氏(右)

会長(英国)、カリ・レイビオヘルシンキ大学学長(フィンランド)が出席しました。

本会議に先立ち、17日には、サマーセットハウスのギャラリーでレセプションが行われ、交流が深められました。翌日ランドマークホテルで行われた本会議では、第一回の会合で取り上げられた課題について、より深い具体的な議論がなされました。サステナビリティ、共生哲学など、東京大学が国際社会の中でリーダーシップを発揮すべき課題や、より多くの留学生の受入れ、女性の地位向上など多様性の強化等について意見が交わされ、これらの議論を踏まえたプロジェクトも、東京大学とメンバーの間でいくつか立ち上がりつつあります。

この会合に際して小宮山宏総長は、「東京とロンドンの2回の会合を終え、会議の内容

もかなり具体的になっており、また運営側の経験も蓄積されてきた」と話しています。

次の第三回の会合は、11月8日～9日に東京で、東京大学創立130周年記念式典の時期に合わせて開かれます。また、来年の4月には、インド・ニューデリーでの第四回の会合開催が予定されています。



プレジデント・カウンシル本会議の様子

## 02

東大レゴ部、「レゴで作った安田講堂」で  
五月祭人気投票文化部門第1位に輝く

本年度の五月祭において、東大レゴ部が「レゴブロックで作った安田講堂」によりMay Festival Award(人気投票)文化部門第1位に輝きました。この「安田講堂」は、1/40のスケールで、きわめて忠実に実物を再現しており、五月祭では多くのギャラリーがその精巧さに賞賛の声をあげていました。



上/東大レゴ部員たち  
左/約5万個のレゴブロックで作った安田講堂



東大レゴ部はレゴ好きの東大生5人が「安田講堂をレゴブロックで作ってみよう」と集まったのがきっかけで結成されました。部員は、レゴ好きであることのみが共通点で、学年も専門分野もまちまちだとのこと。レゴブロック制作経験においても、テレビ番組に出るほどの部員から10年ぶりにレゴを握った部員までバラエティに富んでいます。「安田講堂」はレゴ部結成後最初の活動として制作したもので、3ヶ月半の制作期間を経て完成しました。本学から提供された安田講堂設計図コピーを元に制作用簡易図面を作り、現地調査で得たデータやWEB上の航空写真を参考に、精巧な「安田講堂」を作り上げました。この作品は五月祭終了後に取り壊される予定でしたが、偶然、展示を見たイベント企画関係者の目に止まり、7月から8月の間、三越日本橋店のイベントにて展示されました。さらに、東京大学創立130周年記念事業「知のプロム

ナード」のモニュメントとして学内展示されます。

東大レゴ部は、今後の活動について、以下のようにコメントしています。

「今回の展示を通して、さまざまな偶然の巡り合わせ、さまざまな人との出会いに強く心が動かされました。部員が互いに知り合ったのも、活動がたびたび挫折しそうになったのに進めることができたのも、少人数なので運営に困ったときに助けてくれた方々がいたのも、三越での展示や大学での展示の話が進んだのも、どれも偶然によるものであり、良い経験をさせていただいたと思っています。今後のレゴ部の活動としては、2008年度の五月祭でも何か作品を展示することができたらと考えています」

今後のレゴ部の作品、そして、活動には、学内でも期待が集まっています。

## 03

## 東京大学堀場国際会議 「独創的研究の神髄をコーン バーク親子から学ぶ」を開催

第一回堀場国際会議「独創的研究の神髄をコーンバーク親子から学ぶ」が7月23日(月)午後1時から安田講堂において開催されました。

本国際会議は、堀場製作所創業者の堀場雅夫氏の基金により東京大学創立130周年記念事業の一環として、親子でノーベル賞を受賞したアーサー・コーンバーク博士、ロージャー・コーンバーク博士と、アーサーの次男のトム・コーンバーク博士を招いて講演が行われました。

講演に先だって、まず小宮山総長から開会の挨拶があり、続いて、アーサー・コーンバーク博士のもとに留学したことのある新井賢一東京大学名誉教授からコーンバーク家の紹介がありました。次に、アーサー・コーンバーク博士が「遺伝子複製」、ロージャー・コーンバーク博士が「転写装置の三次元構造」、また、トム・コーンバーク博士(カリフォルニア大学サンフランシスコ校教授)が「発生シグナルの働き」について、いかに独創的な研究が生まれたかの講演があり、参加した約900名の聴衆は熱心に耳を傾けていました。また、講演後、山上会館に会場を移して、若手研究者・学生との交流会が行われました。



聴衆の質問に答えるコーンバーク親子。  
(左から、トム氏、アーサー氏、ロージャー氏)

## 04

## 「東京大学アントレプレナー プラザ」がオープン

大学発ベンチャー支援施設「東京大学アントレプレナープラザ」が5月末に竣工し、6月から運営を開始しました。

本施設の建設は学術貢献目的の篤志家のご支援により実現しました。東京大学と篤志家(根本信男氏、株式会社アデランス創業者)との間で締結された契約に基づき、篤志家は産学連携プラザ隣接の土地を定期借地し、本施設を建設の上、産学連携本部が中心となって選定・支援する東京大学関連ベンチャー企業に建物を賃貸します。篤志家は定期借地契約の終了する30年後、本施設を本学に無償譲渡します。篤志家のご支援によって、東京大学は本施設の建設並びに運営・管理に係わる財政的な支出・リスクを原則として負担しないこととなります。

本施設は地上7階建て、延床面積約3,642㎡、各室約58㎡、各階5室、合計30室(2~7階)で、バイオサイエンス系を含む実験室(ウェット・ラボ)としての利用が可能となっています。8月末時点で、11社(計23室)の企業



アントレプレナープラザ全景(北面)

が入居済みあるいは入居予定となっています。現在契約済みあるいは契約中の企業は以下の通りです。(五十音順): 株式会社アイプラス株式会社、株式会社ゲノム創薬研究所、株式会社セルクロス、日本放射線治療品質保証株式会社、株式会社ネクスト21、株式会社ハプロファーマ、株式会社バイオマスター、プロメテック・ソフトウェア株式会社、株式会社モルフォ、株式会社ユウグレナ

東京大学関連ベンチャー企業の大規模拠点の構築は、本学の長年の念願でした。9月26日(水)には山上会館において、東京大学創立130周年記念事業の一環として、東京大学アントレプレナープラザ開業記念式典・講演会が開催されました。



東大HPトップ画面

東京大学で行なわれる各イベントに関する情報は、以下のアドレスからご覧になることができます。

東京大学ホームページURL

<http://www.u-tokyo.ac.jp>

東大 HP トップ



『主な EVENT INFO』



各トピックへ



『一覧>>』



各トピックへ

The University of Tokyo Magazine

東京大学広報誌

淡青

20

t a n s e i 2007/10

東京大学本部広報グループ

〒113-8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号

TEL 03-3811-3393 FAX 03-3816-3913

E-mail: kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

URL: <http://www.u-tokyo.ac.jp>

編集発行/東京大学広報委員会

石見 徹

(広報委員会委員長 大学院経済学研究所 教授)

沼野 充義

(淡青アドバイザー 大学院人文社会系研究所 教授)

アートディレクション/

細山田光宣(細山田デザイン)

デザイン/

グスクマ・クリスチャン(細山田デザイン)

撮影/貝塚純一

印刷/石田大成社

発行日/平成19年10月31日



### 明治時代の旧医学部本館

明治12年（1879年）に竣工した旧医学部本館の姿です。当初は講義が行なわれ、後には病院外来として使用されました。明治43年（1910年）に赤門脇に移築されて史料編纂掛が使用し、その後、昭和35年（1960年）頃まで営繕課が使用していました。本学最古の建築物、また、国の重要文化財として、現在も総合研究博物館小石川分館として使用されています。東京大学130年の歴史の重みを今に伝える時計台です。